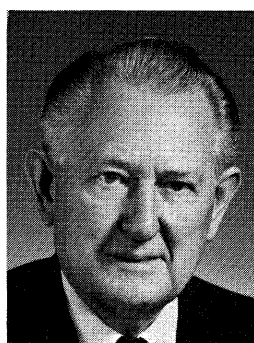
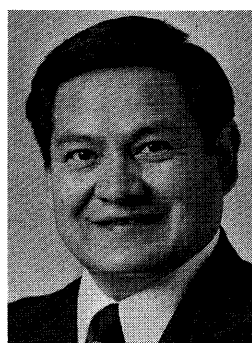
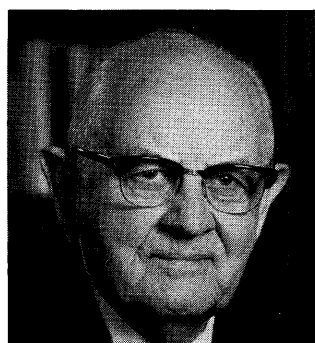


聖徒の道 1 1977





末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スペンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
デルバート・L・ステイブレー
リグランド・リチャーズ
ハワード・W・ハンター
ゴードン・B・ヒンクレー
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・パッカー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ペリー
デビッド・B・ヘイト

諮問委員会

ゴードン・B・ヒンクレー
マービン・J・アシュトン
L・トム・ペリー
マリオン・D・ハックス
ジェームズ・A・カリモア
ロバート・D・ヘイルズ

教会誌編集主幹

ディーン・L・ラーセン

国際機関誌

ラリー・ヒラー (編集主幹)
キャロル・ラーセン (編集副主幹)
ロジャー・ギリング (デザイナー)

「聖徒の道」

八木沼 修一 (日本語コーディネーター)

1977年 1月号

も く じ

道はまたひとつになった……………	スペンサー・W・キンボール……………	1
日々の恵み……………		5
将来を共にするレーマン人と末日聖徒……………	ディーン・L・ラーセン……………	7
質疑応答……………		11
主は生きていらっしゃる……………	アリス・ストラトン……………	13
大管長会の話……………		16
草原の麒麟……………	マーリ・J・プリングル……………	18
おもちゃばこ……………		20
スティーブン……………	ペーン・ホートン……………	21
教会幹部の妻……………		
アイダ・ジェンセン・ロムニー……………	モーリン・ジェンセン・ワード……………	24
積極的な人生……………	リグランド・リチャーズ……………	27
「ふたりまたは三人が集まっている所には」……………	ジェラルド・R・シェーファー……………	28
ローカル・ニュース……………		30

聖徒の道 1月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布 5-8-10
配 送 東京ディストリビューション・
センター
東京都港区南麻布 5-10-25
定 価 年間予約1,700円 1部 150円
海外予約1,700円

INTERNATIONAL MAGAZINE Printed in Japan

郵便振替口座番号 東京 0-41512
口座名 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京ディストリビューション・センター

私はかつて年老いたナバホインディアンの兄弟からある話を聞いたが、以来たびたびそのことが心に浮かんでくる。彼はこう言った。「この福音はわしらが一生かけて思い出そうとしてきたものだ。それが今、いっぺんにわしらの前に現われた。わしらの先祖は昔はあんた方の先祖と一緒にいた。だがわしらの歩いていた道の真ん中に大きな岩があった。それで、わしらは一方の道、あんたがたはもう一方の道を行った。そして長い時間かけて岩の脇をまわった。こうして今また一緒になった。これからはいっしょに歩くことだろうな。」

これは、主がその民を導く歴史という点から考えれば、大きな真理である。

このレーマン人の兄弟と私は共通の先祖を持っている。

私たちの体内を主の選民、すなわちアダム、エノク、ノアなど、旧約聖書の偉大な族長たちの血が巡っていることを思うとき、心に深い感動を覚える。私たちの共通の先祖が、これより偉大な人物はいないと言われるあのアブラハムであることを、私は謹んで認めるものである。主はアブラハムの子孫を通じて、この世における主の尊い目的を遂げるように定められた。古今東西の偉大な予言者のひとりイサク、ならびにイスラエル全家の父ヤコブは私たちの先祖である。エジプトに売られたヨセフは、父の家の民にとって時代の救い手となった節操の人である。彼はまた、リーハイ、イシメル、ゾーラムの子孫も含めて現在の大半の教会員の先祖でもある。

私は自分たちの先祖がそれぞれ違った道を歩み始めた

大管長会メッセージ

道はまたひとつになった

大管長

スペンサー・W・キンボール

幾世代にもわたって離ればなれになっていたヨセフの子孫は、福音の兄弟愛のもとに再び結ばれるであろう



きのその分かれ道のことを思った。そのとき、不従順と反抗により、モーセのこの言葉が成就され始めたのである。「主はあなたを敵の前で敗れさせられるであろう。あなたは……彼らの前で七つの道から逃げ去るであろう。」

主は地のこのはてから、かのはてまでのもろもろの民のうちにあなたがたを散らされるであろう。その所で、あなたもあなたの先祖たちも知らなかった木や石で造ったほかの神々にあなたは仕えるであろう。」(申命28:25, 64)

この予言者の言葉は、いかにみごとに現実となったことか。聖典には、主が古代イスラエルの民に忍耐を示された話が随所に見られる。民の愚かさを忍び、絶え間のない不平を聞き、民の汚れに驚き、偶像崇拜や姦淫を憂いたもうた。しかし主の民はついに不義と反抗をもってその神を拒んだのである。そして、聖なる予言者の言葉通りに、主はその民を散らされた。主は時に応じて民を分け、ついに世界の四隅に散らされたのである。「見よ、わたしは命じて、人がふるいで物をふるうように、わたしはイスラエルの家を万国民のうちでふるう。」(アモス9:9)

まず北のイスラエル王国が2,700年ほど昔に戦いに破れ、民はアッシリアに捕われて行った。そのときから、私たちの先祖であるこの民、すなわち「イスラエルの失われた十支族」として知られる民、特にエフライムの民は、世界中の異教の国に散らされ、何千年も続く背教の暗闇に落ちて行ったのである。

この最初の捕囚があつて100年と少し経った頃、南のユダ王国がネブカデネザル軍の攻撃を受け、エルサレムは略奪され、住民のユダヤ人は幽囚された。時を経てその一部は帰されたが、残りのユダヤ人は西アジア全土に散った。主イエス・キリストと使徒たちが導きと恵みを施した時代の後、エルサレムは再び崩壊し、不従順で不義なユダヤ人は再び先祖の土地から追われて、地上の暗黒の中をここかしこに放浪し、現代のイスラエル集合を待つ身となった。

ユダヤ人幽囚の直前の紀元前600年に、主はイスラエルの家の別の一支族をエルサレムから導き出された。父のリーハイは滅亡の前にエルサレムを逃れ、主に導かれてアメリカ大陸でその子孫を増した。それは神の導きのもとに働く偉大な人物を指導者としていただく民であった。しかしそれにもかかわらず、彼らも不従順と反逆と邪惡に陥って、主のみ前から断ち切られ、罰せられ、散らされた。

私たちの道が分かれてから数多い世紀が去来し、おびただしい人間が生まれては死に、あまたの王国が盛衰していた。私たちは世界史の中に主のみ手を見た。イスラエル支族の多くがさすらうのを見た。

しかし主はイスラエルをお見捨てにはならない。イスラエルは万国にふるい散らされるが、主はそれでも「ひと粒も地に落ちることはない」、失われることはないと言われたからである(アモス9:9参照)。この時代にも、ユダヤ人がいにしえのエルサレム、彼らのゆずりの地に集合するた



めの道を備える政治の動きを、私たちは目にしている。比較的最近の歴史も、予言者ジョセフ・スミスによって福音が回復されるためにアメリカの地が準備されていたことを示している。また、新エルサレムの地にヨセフの残りの者が多々集合しているのを見ることもできる。私たち自身が太子予言者イザヤの言葉の成就を目撃しているのである。

「終りの日に次のことが起る。主の家の山は、もろもろの山のかしらとして堅く立ち、もろもろの峰よりも高くそびえ、すべての国はこれに流れてき、多くの民は来て言う、『さあ、われわれは主の山に登り、ヤコブの神の家へ行こう。彼はその道をわれわれに教えられる、われわれはその道に歩もう』と。律法はシオンから出、主の言葉はエルサレムから出るからである。」(イザヤ2:2-3)

私たちが目にしているのはその発端にすぎない。イスラエルを再びシオンに返すみ業は、地の果てまで広がるであろう。それについて、予言者ハバククの言葉が思い出される。「諸国民のうちはを望み見て、驚け、そして怪しめ。わたしはあなたがたの日に一つの事をする。人がこの事を知らせても、あなたがたはとうてい信じまい。」(ハバクク1:5)

「主は言われる、それゆえ見よ、人々は『イスラエルの民をエジプトの地から導き出された主は生きておられる』とまた言わないで、『イスラエルの家の子孫を北の地と、そのすべて追いやられた地から導き出された神は生きておられる』という日がくる。その時、彼らは自分の地に住んでいる。」(エレミヤ23:7-8)

このイスラエル集合の事業にとって非常に重要なのが、回復されたイエス・キリストの福音の祝福をレーマン人に伝える事業である。なぜならば、末日の主のみ業は、この偉大な約束の子らが群れに連れ戻されない限り、決して、



全うされないからである。主は予言者リーハイを通じてこう言われた。「見よ、まことにかれらは再びイスラエルの家の者と認められ、また『かんらん』の木の元の自然の枝であるから真の『かんらん』の木に接がれる、と言うのであった」(I ニーファイ15:16) 私たちはこの出来事を目のあたりにしている。レーマン人も異邦人も、私たちを分けた岩が取り除かれるのを見た。

レーマン人の民の復帰の道程は決して容易なものではない。とりわけレーマン人自身にとって。モルモン経の記録が終わって以来1,000年、この民は霊の暗闇をさまよい、アメリカ大陸と海の島々に散って行った。彼らは書き言葉を失い、高度の文明を失い、最悪なことに生ける神とみ業についての知識をなくした。そしてヨーロッパの人々がアメリカに上陸してからは、冷酷に追い立てられ、殺され、卑しめられた。

この民の没落を顧みて涙を流さない者は、無情この上ない者である。しかし、レーマン人はこの地に長らえ、このヨセフの残りの民は再び約束のゆずりに入ると、主のみ言葉は告げる。

今から70年以上も昔に私はレーマン人の中で生活していた。当時、レーマン人の絶滅は純然たる現実であった。私には、この没落した民が破壊から立ち上がり、主が約束されたように今一度強大な民になることなどとても不可能に思えた。私はそのときにウィルフォード・ウッドラフ大管長の言葉を読んだのを覚えている。

「レーマン人は山の上でばらのように花開くであろう。私はこの場で申し上げたい。私はそれを信じているが、国家権力が彼らを地の面から滅ぼし去ろうとしているのを見るとき、私はこの予言の成就が、おそらく今までに読んだ神の啓示のどれよりも信じがたい。この福音を受け入れる

人もいなくなるのではないかと思われるほどである」(Journal of Discourses「説教集」15:282)

しかし、レーマン人に関する主の約束は、この神権時代のモルモン経の出現とともに成就し始め(イテル4:17参照)、私は現在、彼らが再び栄え、美しい衣を身につけ始めているのをこの目で見ています。

インディアンに対する私の関心は、私が11歳のときに受けた祝福師の祝福によってさらに大きなものとなった。その数行を御紹介したい。

「あなたは多くの民に福音を宣べ伝えるでしょう。特に、レーマン人に伝えるでしょう。主はあなたに、言語の賜と、その民の前に福音を非常にはっきりと現わす力の賜とを恵まれるからです。あなたは彼らを組織立て、またこの民を囲むとりでとして立つよう備えられるでしょう。」

しかし祝福師はほかのだれも、このことを想像できなかったに違いない。この祝福を受けたときに、私は一介の田舎の少年であったし、私が世界に出て行って福音を伝えるとか、ましてや世界中のほぼ全種族を訪れることなど、全く可能性のないことだった。その約束が今このように実現している。まさに驚きである。レーマン人は現在、数も力も増しつつある。ナバホインディアンが悲惨な幽閉を解かれてニューメキシコ州のフォートサムナーから戻ったとき、生存者はわずか9,000人であった。しかし、現在は10万人を越している。世界には1億3千万人に及ぶレーマン人がいる。彼らはそれぞれ居住する地域社会で政治的な責任と活動力を伸ばしつつある。雇用状況も生活水準も向上している。

教会は彼らの間にすでに根を下ろし、これからも発展し続けるであろう。現在35万人以上のレーマン人教会員がおり、彼らは熱心に集会に集っている。彼らは神権を持ち、支部長、定員会指導者、監督、ステーキ部長など、このみ業のあらゆる分野で指導者として活躍している。また神殿に入り、昇栄に必要な儀式を受けている。彼らは英知ある誠実な民、偉大な祝福された民である。

太平洋から大西洋、カナダ沿岸からチリ南部、ハワイからニュージーランドに至る海の島々まで、この福音をレーマン人に伝える特権のあることは、私の喜びである。私はこれらの兄弟姉妹たちと食卓を共にし、歓談し、客となって家に招かれた。

私が会った人々の中には、レーマン人であることを多少とも恥じている人がいた。どうしてそうなのか。ある人たちは自分はニーファイ人だ、ゾーラム人だ、いやヨセフ人だ、なに人だと主張する。確かに誤解がある。彼らは、主がその誓約の民に約束された大きな祝福を拒むのだろうか。自分の生得権を捨てるのだろうか。主御自身がこの民を、父リーハイ、イシメル、ゾーラム、ミュレク、その他モルモン経の民の子孫のすべてを総称してレーマン人と呼ばれたのである。文字通りのレーマン人の子孫と、そして「ま

た謀反によりてレーマン人となりたりし者」(教義と聖約10:48)のすべてを総称して。

レーマン人である人々は、このことを忘れないでほしい。あなた方レーマン人の先祖は、イスラエルの他のどの支族に比べても謀反が決して大きいわけではない。イスラエルの子孫はすべて背教に堕ち、霊の暗闇の長い夜を経験し、ただ神の慈悲によってのみ、どの支族も完全な破滅を免がれたのである。異邦人とエフライムの混血が最初に、次いでヨセフの残りのレーマン人が、「あとの者は先になり、先の者はあとになるであろう」(マタイ20:16)という言葉の通りに。レーマン人の人々はこのことを覚えてほしい。あなたがたの先祖には、ニーファイやその兄弟であるリーハイのような人物がいる。彼らは宣教師として主の召しに仕えていて投獄されたときに、信仰に満ちて義しかったため、火に囲まれても焼かれず、彼らの顔はモーセが山から下りて来たときのように輝いた。迫害者たちが「この二人は誰と話し合っているのか」と聞くと、「二人は神の使と語り合っているのだ」という答えであった(ヒラマン5:38, 39)。あなた方は選ばれた民である。輝かしい将来がある。あなた方はこの地のあらゆる富を所有するかもしれないが、それもあなた方がこの教会に占める立場に比べれば無に等しい。多くの国々を治めるかもしれないが、あなた方が至高者なる神のもとで王、女王として聖なる神権によって持つことができるものに比べれば、それも無に等しい。

これらの兄弟姉妹たちを見て、「黒くて汚らわしい」(I ニーファイ12:23)と思う人たちは注意しなさい。あなた自身の先祖はどうであろうか。私たちの先祖を見てみよう。汚らわしい邪悪な先祖を見出すことであろう。聖典に目を転じ、レーマン人をはじめ、主の選民に関する主のみ言葉を捜しなさい。

主は言われた。「われはその後異邦人の心を柔ぐるにより、かれらは汝の子孫(ヨセフの残りのレーマン人)にとりて父のごとく成るべし」(II ニーファイ10:18) 慈父は子を侮りはしない。その子らは選ばれた民であり、この教会は彼らを正当なゆずりに復帰させる事業に多大の役割をになっている。現在のこの民と未来のこの民との隔たりはひとつの機会と言える。そして福音がその機会を提供する。私たちがそれを提供しなければならない。「その日、わがシオンを起さんと努むる者は幸福なるかな。かれらは聖霊の賜と能力とを受くるによる。またかれらもしも終りまで忍ばば、終りの日に挙げられて……。また平和を宣べ大いなる喜びの音ずれを宣べ伝うる者は山の上に在りていかばかり美しきかな」(I ニーファイ13:37)

もうひとつ、はっきりさせておきたいことがある。

アメリカの地は無条件ではなく、神の律法を守って忠実に神に仕える人々のみが受け継ぐのである。神の戒めに従ってこそ、この地は私たちのものとなる。だれであれ、こ

の地を得ようとする者は神に仕えなければならない。さもなければこの地から一掃されるであろう。

そこできょう私の訴えたいことは、あらゆるレーマン人、ポリネシア人、インディアンに、神の戒めを守り、この選ばれた地に住むにふさわしくなっていたきたいということである。さらに警告したい。あなたがたの力を高邁な目的の達成に使い、神の栄光を真心から仰ぎみて、信仰を保ち、福音の原則を守りなさいと。

あなた方の救い主だと公言する者も現われよう。彼らはあなた方を強力な話術や新奇な哲学のとりこにするかもしれない。もしその指導者が身勝手な疑わしい動機を抱いていたならば、彼らとは手を切りなさい。おそらくある者はあなた方を愚かな行動に扇動するであろう。用心しなさい。

正当な手続きを経て選ばれた指導者に耳を傾け、平和な手段でのみインディアンに独立と平等と完全な自由を得させようとする人々にくみしなさい。そのような形の成功だけが永続するのである。

主は広大な計画を持っておられる。私には、それがこの教会のプログラムを通じて実行されるという堅い確信がある。現在すでに教会はレーマン人に教育を施し、生活と健康の水準を高め、彼らの贖い主の福音を伝えている。レーマン人への伝道に一層の努力を喚起したところ、大いに喜ばしい反応があった。レーマン人の地域における伝道は実に活発で成果も大きく、宣教師ひとりあたりの改宗率は他の伝道部をはるかにしのいでいる。それは昔の時代そのままである。「レーマン人が容易に甘んじて主の道を信ずるから、主がますますその『みたま』を授けたもうたことが明らかである」(ヒラマン6:36) 現在はレーマン人の宣教師が大勢伝道に出ているが、その数はこれからさらに増すであろう。

私たちは自分の信仰を働かせてこの業をさらに進めることができないだろうか。イノスは強い信仰をもって祈り、レーマン人が守られるという約束を主から得た。数多い末日聖徒の家族が毎日ひざまずき、信仰をもってこれら兄弟たちの間にみ業が早く進められ、扉が開かれるように祈ったならば、何と素晴らしいことであろうか。主イエス・キリストが再び帰ってその民を導き、福千年が開かれ、地球が元にあたたまって樂園の栄えを受け、地が合してひとつの地となる日が来る。レーマン人はその日のために、神の家の兄弟姉妹とひとつになってみ業を推進するために、再び威厳と力をもって立ち上がらなければならない。予言者たちがこう告げた通りである。「ヨセフの家の残りの子孫はこの地でふえ、この地はかれらの受け嗣ぎの地となる。かれらは主のために昔のエルサレムのような聖い都を建てて大地が過ぎ去る終りの時までにはや散り乱れない」(イテル13:8)

私はこれを堅く信じている。

日々の恵み

福音に従い、主を愛する日々の経験は、一つ一つ末日聖徒の胸に刻まれていきます。これはだれもが持っている物語です。証を強くした経験、祈りが答えられたこと、神権の祝福、愛する家族や友人の受けた靈感、教会の活動

を通して得た報いなど、あなたの経験をみんなで分かち合いましょう。
宛先は東京都港区南麻布 5-10-25
中正堂会館
末日聖徒イエス・キリスト教会翻訳事業部 日本語コーディネーター

ジョージ・リー長老： 「私に与えられた機会 はみな主のおかげです」

ローレンス・カミンズ

七十人第一定員会のジョージ・リー長老は、1943年3月23日、コロラド州トワオクでナバホインディアンを両親として生まれました。

少年時代のリー長老は、出生地のコロラド州トワオクの居留地において、ナバホ族独特の土間の小屋で暮らしました。電気器具も近代的な利器もなく、12人の子供たちはみんなひとつ屋根の下で生活しました。

リー長老は語っています。「父は変わり者でした。英語がわからない上に、インディアン文化に非常に固執していました。父は羊飼いで、猛烈な働き者でした。そして寝過ぎすのを嫌い、『お陽さまより先に起きろ』というのが口ぐせでした。

父は女性を尊敬するように私たちを教育しました。また、神は感情のある

御方であるとは考えていませんでしたが、自然を崇拝していて、土も山も動物も虫も、すべて生き物は神によって造られたのだから、食べる時以外は大切に守らなければならないと言っていました。私たちはあらゆる生き物に親しみを感じていました。

がらがらへびが小屋に入ってくると、父は静かに話しかけて棒でやさしくつかまえて、家から百メートルも離れた所に連れて行き、何もしないからどこかへ行きなと言っ置いて来るのでした。

父母は10キロも離れたところに水を汲みに行き、肩にかついで運んできました。水が凍る冬は水を叩き割って袋に詰めて家まで運び、ストーブで解かして飲み水にしました。」

リー長老が初めて福音に関心を持ったのは、コロラド州マンコスクリークで交易所を経営していたブルームフィールドという名の末日聖徒の夫妻を通じてでした。彼はそのときまで永遠の父なる神は礼拝していませんでしたが、覚えている限り、問題があるときにはいつも造り主に祈っていました。

「7歳のときにすばらしい霊的な経験をしました。3日間病気をしたときのことで。

病気が進行し、両親はまじない師を呼びました。

私の両親は英語が話せません。昔かたぎのナバホなのです。

まじない師の祈祷はききめがありませんでした。前よりもかえって悪くなりました。そして3日後、心臓が止まりました。

父は棺を作り、私に埋葬の衣装を着せました。そして私を棺に入れ、ふたをして墓穴に降ろしました。

そのとき箱がどしんと降ろされたショックで、息をふき返したのでしょう。」リー長老は、棺をとんと叩くと両親が驚いて墓から棺を引き上げ、ふたをあけたと語っています。

「私の最初の言葉が、『ソーダ水を飲みたいよ』でした。」

ブルームフィールド夫妻が彼につけたニックネーム「ソーダ坊や」はこれに由来しています。しかし彼らはその少年の蘇生は決して偶然のことではなく、なすべき大切な仕事があるからであると感じました。

ジョージ・リーは9歳でバプテスマを受け、11歳のときにインディアンのための里親制度の1回生になりました。彼はユタ州オーレムのグレン・ハーカ一家の人々と一緒に生活しました。「学校時代に自分がインディアンであることを意識しませんでした。大きくなっても肌の色など気にしたことがありません。どんな人でも尊敬するように教えた父の影響もあるのでしょうか」とリー長老は言っています。

リー長老はサウスウエスト・インディアン伝道部で宣教師として働きました。

1967年12月に、リー長老はソルトレーク神殿で、キャサリン・ヘティチという名の美しいコマンチの女性と、スペンサー・W・キンボール長老の司式で結婚しました。リー長老夫妻の子供は、6歳のデュエン・マイケルと5歳のチャド・トーマス、10ヵ月のトリシアの2男1女です。

ジョージ・リー長老は30代ですが、学問的業績とその指導力に対して与えられた賞の数には目を見張るものがあります。彼は教育学修士号を持ち、博士論文を最近完成しました。1974年に



は、主としてアメリカ原住民を対象とした短期大学、アリゾナ州ガナドのガナドカレッジの学長になりました。

しかし、これまで述べてきた数々の事柄もさることながらジョージ・リー長老をよく物語るのは、その温和な精神と主に対する絶対の信仰です。彼は謙遜な人で、「私に与えられた機会はみな主のおかげです。私は主に使われる道具となって、善を行ない、民に仕えたい」と語る。

リー長老はナバホインディアンの遺産よりも教会と家族を優先させてきたのでした。七十人第一委員会会員およびアリゾナ・ホルブルック伝道部長という新しい責任は、リー長老夫妻に、兄弟姉妹を福音の光の中へ連れ戻すさらに大きな機会をもたらすことでしよう。

(ローレンス・カミンズ 「フレンド」誌編集副主幹、ソルトレーク・ハイランドステーク部ストラトフォード・イーストワード部のワード部書記補助)

「私たちは什分の一を納めました」

ダニエル・アフアマサガ・ベサム

私は教会に入るとすぐに什分の一を納める決心をしましたが、他の献金はほかの用途があって納める余裕がありませんでした。その出費のひとつが5ヘクタールの土地と家の借金で、月々の支払いが2週間以上滞ったら売り手に引渡しという条件で購入していました。しかし、私は祈ってお金の使途を

尋ねた後で、土地の月賦払いの分を什分の一にまわすとよいと感じました。土地を持ちたい人は大勢いますし、売り手も引渡しを望んでいるので、本当に心配でした。けれども私たちは天父を信頼していましたので、支払いができるようにきつと道を備えて下さることを知っていました。

私は慰みに豚を飼育していましたが、豚はなかなか売れません。ところが什分の一を納めた数日後、ある人から豚を7頭売ってほしいと言われました。その買値は土地の支払いとぴったり同じ金額でした。

それから、この先どうしたら什分の一を納めてゆけるか心配で、そのために食費やその他の出費を切りつめなければならぬと思いました。しかしその必要はありませんでした。主がまた祝福を下されたのです。私の国では給料が増額されることはほとんどありません。ところが間もなく、什分の一を納めた上に、さらに初めて貯金ができるほどの昇給を祝福されたのでした。

私たちの家族は教会に入ってから本当に恵まれてきました。私はアピア・サモアウエストステーク部の第二副ステーク部長、そして妻はローレルの教師と、扶助協会と日曜学校のオルガニストとして働いています。

「涙が出てどうしようもありませんでした」

トンガ・トウタイ・バレッツア

トンガ・トウタイ・バレッツア伝道部長は祝福師の祝福の中で、「地上のみ業を推し進め、隣人に仕えるべく……

賢明な目的があつてシオンのステーク部の中心地より離れた地に生を受けた」と言われました。1942年に教会に入ったときから、それが彼の生き方でした。

バレッツア伝道部長は長年、トンガの公立学校で教えていました。その後、1955年に教会の学校で教えるようになりました。それから間もなくトンガ教会学校の宗教部長になって、1974年までその任にありました。同時に、ステーク部長の責任も務めました。1974年に彼はスペンサー・W・キンボール大管長から、トンガ・ヌクアロファ伝道部長に召されましたが、そのときバレッツア伝道部長は「胸が高鳴り、涙が出てどうしようもありませんでした。私はそれを体中で感じました」と言っています。

バレッツア伝道部長は証しています。「疑いもなくモルモン経は、この教会の頭である救い主、神の御子イエス・キリストを証する第2の書です。モルモン経には完全な福音と、私の先祖の真実の歴史が載っています。この国民はトンガ人と呼ばれていますが、私は主の名づけられたレーマン人という名で呼ばれるときに誇りを感じます。私の皮膚の色は褐色ですが、私の血は純粹です。これはニーファイ、リーハイ、ヨセフ、ヤコブ、イサク、アブラハムの血です。

先祖リーハイが子孫に望んだように、私の兄弟たちにも生命の木の実を食べさせることが、私のめざす目標です。トンガ人がこの木の実を食べ、この国の全家族とリーハイの子孫全員、貴族や平民、イスラエルの家、天父の愛する子供たちにモルモン経が行き渡って、みんながシオンに集められるようになることが私の望みです。」

回 復された教会の初期の歴史を見ると、アメリカンディアンとそれより数の多いレーマン人国家の民に対する教会指導者の見解は、明らかに世の見解と異なっていた。当時この民は、一見して教会の発展とその将来に重要な役割を演じるようには思えなかった。

これに対して末日のレーマン人に対する初期の教会指導者の見解は楽観的で、当時の世論と全く相反していた。アメリカンディアンが「滅びゆくアメリカ人」とされ、幾つかの州や准州で実際に絶滅の奨励金が出た時代に、教会指導者は彼らの輝かしい将来を予言したのであった。

設立後間もない教会がその基の確立に苦闘し、経験あるすぐれた指導者を大勢必要としていたとき、初めて正式の伝道旅行が行なわれた。しかしその旅行先は、北東部諸州の将来性ある人口集中地域ではなく、半文明のインディアン種族が住む西部であった。その伝道にはオリバー・カウドリ、パーレー・P・ブラットという教会の最も卓越したふたりの指導者が全力を傾注し、その間彼らは教会管理の中枢から退いたのである。

当時の傍観者たちにとっては、しいたげられ、うとんじられている民族に教会指導者の力を注ぐことは不合理であ

将来を共にする レーマン人と末日聖徒

ディーン・L・ラーセン





り徒労とも見えたとはいえない。神権役員の中にさえ、レーマン人に対する教会の伝道活動を自分の信仰に対するチャレンジと受けとめる人々がいた。

ウィルフォード・ウッドラフ長老は、1873年1月12日に次のように述べている。

「レーマン人は山の上でばらのように花開くであろう。私はこの場で申し上げたい。私はそれを信じているが、国家権力が彼らを地の面から滅ぼし去ろうとしているのを見ると、私はこの予言の成就が、おそらく今までに読んだ神の啓示のどれよりも信じがたい。この福音を受け入れる人もなくなるのではないと思われるほどである。」(Journal of Discourses「説教集」15:282)

100年前の情勢ではレーマン人の将来は非常に悲観的であった。しかし、ジョセフ・スミスとそれに続く人々のこれら主の選民に関する信仰と示現は、その正しさが現在立証されつつある。

教会が組織されて半年後に始まるオリバー・カウドリ、パーレー・P・プラット、ピーター・ホイットマー、ザイバ・ピーターソンらのレーマン人に対する伝道の物語には、心ひかれるものがある。それは高遠な希望と挫折、限りない忍耐と漸進的な成功の連綿とした糸である。その劇的な終幕は、今なお未完である。それは教会一般史にまたとない信仰を鼓舞する事柄でもあり、その基盤は旧約の時代から伝えられた約束の予言とからみあって、取り消す方なき誓約を主から受けた民の末裔へと、興味深くもつながるのである。ある意味で、カウドリ、プラット、ホイットマー、

ピーターソン長老らの伝道は、主とこの最後の福音の神権時代にある僕たちとによって成就される、贖いの業に深い関わりを持った予言の一大ドラマの序曲であった。

モルモン経の由来と内容を知る末日聖徒にとって、ジョセフ・スミスが当時のレーマン人の中で贖いの業を始める仕事になぜあのように打ち込んだかは、悟るにそう難くないはずである。ジョセフは金版からモルモン経のとびらのページを翻訳していた。そのページに記された次の言葉は、青年予言者の知と情に鮮烈な印象を残したことであろう。

「それであるから、この経典はニーファイの民の記録とレーマン人の記録とを短くまとめたもので、イスラエル家の残りの子孫であるレーマン人……に伝えるために書かれたものである。」

主は、ジョセフ・スミスがマーテン・ハリスに渡した翻訳済みの原稿を紛失した後、彼に与えた啓示の中で、このことを重ねて強調しておられる。「すなわち、この証はまたレーマン人、レミュエル人およびイシメル人の間にも知らるべきなり。これらの者はその先祖らの罪惡によりて不信仰に墮落せしものにして、……神彼らをしてこれを亡ぼすを許したるものなり。而して以上の記録を載せたるこれらの金版は、実にこの目的のために保存されたり。」(教義と聖約3:18-19)

ニーファイ人、レーマン人のこの記録を保存した人々に対してジョセフがどんな義務感を覚えたか、想像していただきたい。彼の一生の目的も行く末もその民と固く結びつき、彼にはレーマン人が自分と同じ時代の人と思われたに

違いない。そこで、ニーファイの願いが彼の意識にいかにか重く響いたか考えてみていただきたい。ニーファイは次のように語っている。

「その時に私たちの子孫の残る者は、私たちのことと私たちがエルサレムを出てきた時のことを知り、また自分らがユダヤ人の子孫であることが解るようになる。そしてイエス・キリストの福音がかれらの中に宣べ伝えられるから、それによってかれらは自分らの先祖のことを知り、またその先祖がイエス・キリストのことをよく知っていたことも知るようになる。」(II ニーファイ 30 : 4 - 5)

また、イノスの切望も強い印象を残したに違いない。

「この言葉を聞いて私イノスは主を信ずる信仰がいよいよ固くなり、私の兄弟レーマン人のためにたびたび長い間一心不乱に主に祈った。

私はまた信仰をこめて私たちの歴史を護りたもうように神に願ったから、神はそのみこころにかなった時になってその歴史をとり出してレーマン人に授けようと私に誓約したもうた。」(イノス 11, 16)

モロナイが民の記録を結ぶにあたって一番気がかりだったのは、末の時代まで所有の地に長らえるはずのレーマン人のことであった。モロナイは彼自身の名を冠する書の最後の章の書出しに、モルモン経を読むすべての人に呼びかけるあの感動的なチャレンジと約束を一体だれに対して告げたのか、はっきり語っている。「私モロナイは、私が善いと思うことをいささか私の兄弟であるレーマン人へ書きのこす。」(モロナイ 10 : 1)

ジョセフ・スミス自身は、直接モルモン経の民の子孫に教える機会をあまり持たなかった。しかしあるとき、ジョセフのもとにインディアン(先住民)の酋長ケオクックは、キスクロシュ、アペヌーズ、そのほか 100 人ほどのサク族とフォックス族の酋長や戦士、ならびにその家族を伴ってきた。B・H・ロバーツ長老はその来訪の模様を次のように記している。「スミス大管長はしばらくの間、主が彼らの先祖について彼に啓示された事柄を話し、モルモン経に記されている彼らに関わる約束を詳しく話して聞かせた。……予言者が自分たちの先祖の話、その栄枯盛衰と、また堕ちた状態から贖われるという約束を語るのを聞いて、彼らの心は燃えたに違いない。」

ロバーツ長老によると、ケオクックはジョセフに次のような返答をしたという。「私のテントに、あなたが幾月も前にくれたモルモン経がある。あなたは偉大で善良な方だと思う。ケオクックは野蛮に見えるが、私は大霊の子だ。私はあなたの忠告を聞いた。私たちは闘いをやめて、あなたの忠告を聞いた。私たちは闘いをやめて、あなたが話してくれた良い話に従うつもりだ。」(A Comprehensive History of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints

「末日聖徒イエス・キリスト教会概史」 2 : 88-89)

合衆国およびカナダ以外でも、早くからレーマン人国民に伝道が開始された。1844年にソシエテ諸島で伝道部が開かれ、1852年にはフランス政府により宣教師が退去させられたが、1892年には復帰の許可がおりた。

ハワイの伝道は1850年に始まり、数年後にはニュージーランドのレーマン人にも伝道が拡張された。これらの伝道部は皆非常な発展を見た。

1851年にパーレー・P・ブラット、ルファス・アレンの両長老が南米初の宣教師としてチリのバルパライソに上陸し、内戦に苦しむ国を見た。恒久的な伝道部は組織されず、南米大陸における伝道事業は1925年まで延ばされたが、この年に至ってメルビン・J・バラード長老はルロン・S・ウェルズ長老、レイ・L・ブラット長老とともに、アルゼンチン、プエノスアイレスのラプラタ川河岸に近いしだれやなぎの森にひざまずき、南米の地を福音伝道の地として奉獻した。バラード長老は祈りの中で、南アメリカ諸国のレーマン人の間で将来行なわれる業について、次のように告げた。

「また、この土地のインディオ、リーハイの子孫であり、この国に住み、長年しいたげられて多くの苦難にあい、モルモン経の予言者たちの予言のごとくに罪とがのゆえに苦しんだ大勢の民に対して、モルモン経に記された汝の約束の成就の始まりを、我ら見んことを祈りたてまつる。…

おお、御父よ、われらおよびわれらに続く汝の僕らがイスラエルの家のこの支族にたてたもうた汝の貴き約束を宣べるとき、汝のみたまを彼らに注ぎ、これらの真実なることを彼らに示させたまえ。」

バラード長老はこの訪問の報告の中で、次のように述べている。「兄弟たちはそれぞれ簡単に話をした。……彼らはお互いを祝福すると同時に、またこの伝道部を開設したことによって、その地のヨーロッパ人が大勢福音を受け入れるが、それにとどまらずやがては伝道の大事業がインディオに及ぶと感じた。それは重要な日だった。」(ブライアント・S・ヒンクレイ *Sermons and Missionary Services of Melvin J. Ballard* 「メルビン・J・バラードの説教と伝道」 pp. 96-97)

1879年10月の総大会で、3人の宣教師がメキシコシティの伝道部開設のために召された。すでに1876年にメキシコ伝道部の設立が試みられていたが、これは失敗していた。その後、革命期に幾度か伝道が中断された。しかし現在メキシコの伝道部は世界で最も大きな成果をあげており、モルモン経の民の子孫の改宗者が高い割合を占めている。1960年のこの国の統計では、国民のうちの2,600万人がインディアン(先住民)の血を引いているという。

北米、南米および太平洋の島々に住むレーマン人の間で

ほかにも多くの事業が行なわれ、長年にわたってめざましい成功を見ているが、教会事業の中で最も画期的な成果があがっているのはこの20年ほどである。最近の進展は、教会インディアン委員会の委員長として長い間働いたスペンサー・W・キンボール大管長に負うところが大きい。

太平洋、メキシコ、中央アメリカ、南アメリカ全般にわたって大規模な教育制度が実施され、チリ、ペルー、ボリビア、パラグアイ、メキシコ、フィジー、ニュージーランド、西サモア、タヒチ、トンガの教会経営の学校に、総勢16,000人近い生徒が通学している。その大半はレーマン人の後裔である。彼らは地域の教会の将来の大発展をになうべく、機会を得て才能や指導力を伸ばしている。このような場で教会学校に通う若人たちに加え、合衆国やカナダの公立学校や国立学校に通うレーマン人の若人のセミナリーへの登録者が13,000名である。また、およそ1,500名がユタ州プロボとハワイ州ライエのブリガム・ヤング大学に通学している。

現在、教会の30を越すステーキ部が、レーマン人教会員が優勢を占める地域に設立されている。彼らの間での伝道

事業は以前になく盛んである。レーマン人末裔の教会員数は、現在35万人と見積もられているが、これは全教会員数のほぼ1割にあたる。

この業が予言に基づいていることを理解するために、もう一度モルモン経の靈感に満ちた予言に立ち返ってみなければならぬ。救い主御自身が、アメリカ大陸を訪れて民に導きと恵みを施された折、現在のレーマン人の先祖たちに次のように言われた。「その時、すなわちこの民の残りの子孫に福音を伝え始むる時を以て御父の事業は始る。われまことに汝らに告ぐ、その日来らば散らされたるわが民の中にも、また御父がエルサレムよりほかの所へ導きたもうたる行方の知られざる支族の中にも、御父の事業始るべし。」(Ⅲニーファイ21:26)

救い主はイザヤの言葉を引いてさらに続けられた。「山は去り岡は移れども、わが情は汝を離れず、われわが民に立てる誓約も汝を離れず。」(Ⅲニーファイ22:10)

前に述べた通り、ウィルフォード・ウッドラフ長老は100年前に、その予言を受け入れることはむずかしいと語っている。しかしながら近年の発展を見れば、主のみ手がモルモン経の民の末裔をイスラエル支族に復帰させようとしておられることは容易に理解できる。初期の兄弟たちの信仰は、今や立証されつつあるのである。

大きな数歩が踏み出されたとはいえ、レーマン人の時代は今や夜明けを迎えたばかりである。モルモン経の予言者と末日の教会指導者たちが予言したすべてのことが成就されるには、まだ主の民によって大事業が進められなければならない。レーマン人国家と末日聖徒の将来をひとつに結ぶ予言の絆がある。神に聞き従う異邦人とレーマン人には同様の約束がある。私たちの時代はこの土地を所有する異邦人の民に福音の回復がある時代だが、この時代をさして、主の天使はニーファイにこう告げた。「神の子羊言葉と権能とをもちて異邦人に現われそのつまずく石を取り除く時、異邦人もし神の子羊の言葉に聞き従い、神の子羊に向いてその心をかたくなにせずば、異邦人は汝の父の子孫の中に数えらるべし。すなわち異邦人はイスラエルの家の中に数えられ、約束の地にていつまでも永く祝福を受くる者となり、かれらはもはや再び束縛の身とならず、またイスラエルの家はもはや再び散り乱ることなかるべし。」(Ⅰニーファイ14:1-2)

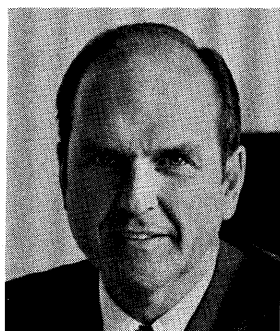
(ディーン・L・ラーセン　この記事を執筆した当時は教会誌・教育資料担当ディレクターであったが、10月の総大会で七十人第一定員会会員に召された。)



質 疑 応 答

本誌の回答は問題解決の一助として与えられたものであり、教会の教義を公式に宣言するものではない。

日曜学校中央管理会会長
ラッセル・M・ネルソン



私の友だちは断食のときに水は飲んでもよいと考えています。そうなのですか。

断食は全く個人的なもので、たいてい何か心に大切なことを考えながら行ないます。ですから、断食の目的とそれを行なう人の問題しだいで、なぜ、どのような断食を行なうかが決まります。

私たちは教会員になると、断食の律法に従って断食をします。通常、そのような断食には3つの目的があります。第一の目的は、断食をする人の謙遜さと、霊性を増すことです。第二はその分の食費を断食献金として捧げ、困っている人々を援助すること、そして第三は各人の健康に良いということです。

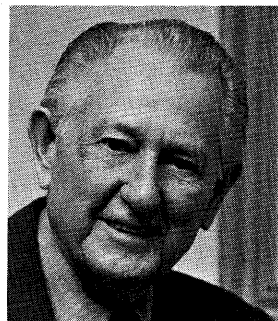
「教会指導総合手引き」(1976年版, p. 81)には次のように書かれています。「月例の断食を正しく守るということは、2食続けて食物と飲み物を断ち、断食証会に出席し、援助の必要な人々のために監督に惜しみなく献金することである」ですから、このような断食では水も飲みません。

ここで、注意したいことがあります。少しでも良いものは、多ければもっと良いだろうという誤った考えの人がいます。過度の断食が良くないことは、1972年6月の「神権会報」に詳しく説明されています。「一部の人がかなり長時間にわたって断食をしているという報告が入っています。……特別なことのために断食しなければならないことがあっても、一日断食したらへりくだって主のもとに行き、主の祝福を求めればそれで十分です。」また、ジョセフ・F・スミス大管長もこう勧めています。「弱い人が多くおり、ある人は虚弱である。またある人は、乳飲み児を抱えている。そのような人に断食を求めてはならない。また親は小さな子供たちに断食を強制してはならない。」(「福音の教義」第1巻, p. 293)

監督への惜しみない献金は、最低2食分に相当する献金と理解されています。そのようにして貧しい人に捧げる惜しみない献金はその人を高め、高潔な人格の最大の特質である愛を育む手だてとなるのです(1コリント13参照)。

各人は断食から実際に益を得ます。聖典には、ある種の悪霊は断食と祈りによらなければ追い出せないと書かれて

います(マタイ17:21参照)。断食による精神の鍛練で、霊が肉体の欲に勝つようになります。その力は、肉欲から出るほかのいろいろな誘惑との闘いでも、私たちを強くしてくれます。体の都合で断食のできない人もいますが、たいていの人はできます。私は断食日に食物と飲み物を断って完全に断食をすると、自信が湧きます。断食というのは、断食ができる健康と体力の賜を造り主に感謝し、自分でもその感謝をかみしめる機会です。それは確かに大きな特権であり、祝福であると思います。



前プロボ神殿長
ハロルド・グレン・クラーク

来世での家族の絆についてはよく聞きますが、友人とも会えるのでしょうか。

私たちすべての者が死後に行く最初の場所は、肉体を脱した霊の世界です(アルマ40:11参照)。ここで親戚や友人は、この世におけると同じように時に応じて互いに言葉を交わすことができます(*Teachings of the Prophet Joseph Smith* 「予言者ジョセフ・スミスの教え」p. 353)。この霊界は活動と休息と勉学の待合所です。ほとんどの者は、復活と最後の贖いと裁きの用意ができるまでここにとどまります。私たちがその霊界を去るときには、そこから移る先が最終的な永遠の住まいになります。その住まいは、私たちが守ってきた律法により支配される王国です。そこも来世と呼んでもよいでしょう(教義と聖約76:89, 107-112参照)。

では、霊界ではどのような人と交流があるのでしょうか。

聖書には、十字架で亡くなられてからイエスの霊はこの霊界に行ったと書かれています。同じときに十字架上で死んで悔い改めた罪人は、その日イエスと共にパラダイスに在るであろうという言葉を受けています(ルカ23:42, 43参照)。このことから、義人も、あまり正しくない人も、全くの悪人も、みんな同じ霊界へ行くことがわかります。その世界にはいろいろ違った場所があります。例えば、ノアの時代に不従順であった者たちもこの世界に行きました。ペテロは、キリストは死んで体が墓に横たえられてから、獄にいるその霊たちの所へ行き、宣べ伝えられたと言って

います（Ⅰペテロ 3：18-20；4：6；「福音の教義」第2巻，pp. 224-228；教義と聖約76：73-74参照）。

このことから、義人は霊界で義人と交流があり、また義しい生活を送らなかった友人を訪れて福音を教えることもできるということがわかります。しかし義しくない人は義人の住んでいる場所へ来ることができません。不従順であった友人、あるいは悪に従った友人は、キリストを信じる信仰を示して、悔い改め、身代りのバプテスマを受け入れ、ひとやよりも良い場所へ行くのにふさわしくなるまでは、ある制約を受けます。ジョセフ・F・スミス大管長は、示現の中で、ノアの時代にあの洪水で死んだ霊たちがひとやにいたのを見ました。忠実な神権者が彼らを訪れて福音を教えていました。不従順な霊やその他の者の神殿の儀式はこの地上で行なわれることになっています。しかし、死者には、神の定められたこれらの大切な儀式を受け入れる機会も、拒む機会も与えられるのです。

霊界での友人たちとの交流についての質問ですが、義人の霊は義しい生活をしなかった霊よりも広い交際が持てるということです。私たちは義しい生活を送るならば、すべての友人と良い目的をもって交わることができるでしょう。義しくない者は、主イエス・キリストを信じる信仰と悔改めと善行と、身代りのバプテスマを受け入れることによって悪の縄目を断ち切り、もっと義しい霊たちの仲間に加わることができます。しかしそれまではある制約を受けます。

復活をして霊界を去るとき、私たちは皆それぞれの住まいを得ます。この世において、また霊界で福音を通して天父から与えられたものをことごとく享受する者は、日の光栄の最高の王国で天父と共に住みます。それよりも低い王国に住む者たちは神のみもとには行けません。友人が低い王国にいて、私たちが御父のみもとに住んでいる場合、私たちは彼らの所へ行くことはできませんが、彼らは永遠に天父が住んでおられる場所へ来ることができません（教義と聖約76：77-88，109-112参照）。低い王国に住む者たちの交際の範囲をつきつめて考えると、態度や思いがその人を本当に左右するものであるとつくづく思い知らされます。私たちの行動が自分の考えを決め、結局は永遠に交わる者たちをも決めてしまうのです。この世において抱いている私たちの感情は、死んだからといって変わるものではありません。どこにいても、人格を培うには努力が必要です。信仰、悔改め、善行には近道はありません（アルマ34：34参照）。この地上にいるひとときは何と大切なことでしょうか。

主が語られたこのような自由や制約はきわめて自然なものです。私たちの態度や行為は気質を形成し、それが私たちの状態をはっきり決定します。この気質が私たちを自由にしたり、無頓着にしたり、制約したりするのです。例えば、予言者モルモンは汚れた者は清い者と一緒にいる方が汚れた者たちと一緒にいるよりもはるかにみじめであると言っています（モルモン9：4参照）。似た者同士の方がくつろぐし幸せなことはごく当然でしょう。それはこの世における交際に似ています（教義と聖約130：2参照）。

限られた時間ではありますが、月の不慣れな環境の中で過ごした宇宙飛行士は、地球に帰ると必ずみんな喜びます。

キリストは真の友情の絆について私たちに語っておられます。弟子たちと話しておられたときに、母と兄弟たちがキリストを捜しに来て話を中断させられたときの言葉です。「わたしの母、わたしの兄弟とは、だれのことか」と主は言われました。そして御自分を取り囲んでいる弟子たちを見まわして、「ごらんさい、ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。神のみこころを行なう者はだれでも、わたしの兄弟、また姉妹、また母なのである」とおっしゃいました（マルコ3：31-35参照）。私たちは身内に対して義務の伴う血縁関係にありますが、必ずしも本当の永遠の兄弟姉妹だとは言えません。さらに言えば、天父のみこころを行なわないうちは真実の友になれません。みこころを行なうことが、神や、最も高貴な神の子たちと永遠の友情を結ぶ絆なのです。

来世における家族についてですが、家族の単位は神から定められたもので、最大限に広く深い友情と愛を実現する可能性を持っています。主の言葉に従って執り行なわれた神殿結婚だけが、完全な友情をもたらします。人は真実の家族生活の特権と義務を通してのみ、「日の光栄の王国」の最高の友情と光栄を受け継ぐことができるのです（教義と聖約132：19-24参照）。天父は私たちの一番の友であり、私たちの霊の父です。ですから私たちには霊の母も霊の兄弟姉妹もいます。天父のようにするには、私たちも神が定められた通り聖なる神殿で結婚して、父、母にならなければなりません。神が私たちに告げられたように家族の中で生活すれば、永遠に語り合う友や分かち合う良い事柄がたくさん生まれます。

友情とは、予言者ジョセフ・スミスの言葉によれば、「世界を変革し、戦争をやめさせ、人を友、兄弟とすべく」計画された末日聖徒イエス・キリスト教会の基本ともいえるべき大原則です。最大の友は人と分かち合える何か良いもの、永遠のものを持っている人です。予言者はまたこうも言いました。「もしそれが私の友人なら、真実の友人なら、私は彼の友となって彼に救いの福音を説き、彼に良い助言をしよう」（*Teachings of the Prophet Joseph Smith* 「予言者ジョセフ・スミスの教え」p. 316）

私たちは福音や御父のみこころを、生きている人だけでなく死んだ人も含めて愛する人や友人たちに伝えるために、できる限りのことをしなければ救われません。また本当に幸せにはなれませんし、完全にもなれません（教義と聖約128：18参照）。こうすることの中に、神殿においてのみ行なわれる儀式が含まれます。この世や来世で、私たちが主イエス・キリストを信ずる信仰を教えることによって、暗闇と不信仰を克服して仲間の輪が大きく広がって行くことを考えてみて下さい。良きおとずれと望みと慰め、そして人を天父と共に住まう永遠の生命へと導く正しい勧告を教える人は、何と素晴らしい友ではないでしょうか。



小さな お友だちへ



主は生きていらっしゃる (実話)

お話 : アリス・ストラトン
イラスト : シェリー・トンプソン

家族がわたしをおいて教会に出かけてしまったとき、私は何とも言いようのない気持ちになりました。みんなが出かけようとしているときに、私は、「きょうは教会に行きたくないわ」と言ったのです。

おばあちゃんは「まあ！」と目を丸くし

ました。

お母さんは「どうして行かないの？からだの具合いでも悪いの？」とききました。

「そんなところね。長ったらしいつまらない話を聞くと気分が悪くなる病気らしいわ」と、私は答えました。

「何だか、うちにはパートタイムモルモンがいるようだな。」お父さんはそう言いました。

「パートタイムなんかじゃないわ。ちゃんとしたモルモンよ。」私は反発しました。

「おまえの証はあぶなっかしいね」とお父さんに言われました。

私は、証と教会に行くことにどんな関係があるの、と言いました。

するとローラが口をはさみました。「おありよ。福音が真実だってわかっていれば、それなりの行ないをするはずでしょう。」

「お説教するのね」と私は文句を言いました。

お母さんに、みんなが教会に行っている間何をするつもりなのかと聞かれたので、私はジョアンたちと遊ぶことを話しました。

「5時には帰れるから、それから遊んだらどう？」お母さんにこう言われましたが、5時まで待っていたら、川のそばで小屋をつくることはできないのです。

お母さんはあきれたように言いました。「お父さんの言う通りだわ。わが家にはパートタイムモルモンがいるようね」

こうして、家族は私をおいて教会に向かいました。私は後をおって門のところまで

走って行きました。そのときローラの声が聞こえました。「アリスはきつとついてくるわ。あの角まで行くうちには、私たちにおいつくわよ。」

そっちがそのつもりなら、と私は思いました。そしてシャツとジーパンに着がえすると、気がすすまないのに、へいのところと呼んでいるジョアンたちのところに走っていったのでした。

いつもなら、川に行くのは楽しいことなのに、きょうはちがいます。今なら集会に間に合う、そんなことを考えながら歩いていました。

川についてみると、まつの枝で組んだ大切な小屋がつぶされているではありませんか。これまでの苦労が水のあわです。ジョアンたちはわめきたてていましたが、私の心は別のことでいっぱいでした。

私は考えました。「証がほしいなら、そのために何かしなければ。これまで、みんながいろいろなことに感謝しているのを聞いたわ。感謝することはたいせつ。感謝しなければ、天のお父様だって、祝福を与えたいとは思えないだろうし。でも、証はそれ以上のものだわ。」

ジョセフ・スミスが森に入って祈りをさげるとき、神と御子を見たわ。そして証

をもつことができた。モルモン経の三人の見証者も、天使があらわれて金版を見せてくれたから、証を得たんだわ。

でも私は、天使を見たことも、天の声を聞いたこともない。私が家族といっしょに教会に行かないで、こうしてきたない服を着、みじめな気持で岩によりかかっているのは、きっとそのためだわ。そのとき、稲妻のようにひとつの考えが私の心を打ちました。家族の中で天使の訪れを受けたり、天の声を聞いたりしたものは、ひとりとしていない、それなのに証をもっている、ということです。

私は岩によりかかりながら泣いてしまいました。証がほしかったのです。「天のお父様助けてください。」私は祈りました。

心の中にだんだんとあたたかいものを感じてきました。そう、証をもつことができたのです。ジョセフ・スミスや三人の見証

者が、イエス・キリストが天のお父様の御子であることを知っていたように、私にもそれがわかったのです。なんてすばらしいことでしょう。涙があふれてきました。

家に着いたときには、みんなはすでに帰っていました。お母さんに、「川で楽しく遊べた？」と聞かれました。私は「さんざんだったわ」と答えました。

次の日曜日は断食日でした。私は家族をおどろかせました。証をしようと、はじめて、説教台の前に立ったのです。言うべきことはちゃんと心得ていたのに、みんなの顔を見たとき、胸はドキドキ、のどはカラカラになり、考えていたことばが思い出せなくなってしまいました。そのとき、台の上の一枚の紙切れに目がとまりました。それには、「閉会の歌：主は生けりと知る」と書いてありました。

私は深く息を吸い、「主はほんとうに生きています。私は知っています」と言いました。なみだがあふれてきました。そして私は「イエス・キリスト様のお名前によって証します。アーメン」と言って、証を終えました。

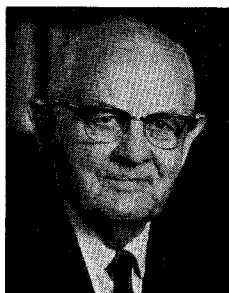
私はお父さんとローラの間にすわりました。すると、お父さんはにっこりし、その大きな手で私をつつんでくれたのでした。





主は道を備えて くださる

大管長
スペンサー・W・キンボール



キンボール大管長は少年のころ、神の言われたことをすべて守りたいと思いました。理想の人はニーファイでした。ニーファイはこう言っています。「私は主が命じたもうたことを行って行く。私は、主が命じたもうことには、人がそれを為しとげるために前以てある方法が備えてあり、それでなくては、主は何の命令も人に下したまわないことを承知しているからである。」（1ニーファイ3：7）

キンボール大管長は、何年間も日曜学校とプライマリーに無欠席を守り通しました。ある月曜日のこと、スペンサーは兄たちと干し草の上で飛びはねていました。するとプライマリーの始まる鐘が聞こえてきました。

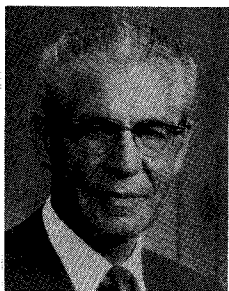
「プライマリーに行かなくちゃ」とおずおず言いました。

すると兄たちは「きょうは行かせないよ。いっしょに遊ぶんだ」と言いました。

「お父さんに言うから」とス

おまえを信頼 していたのに

第一副管長
N・エルドン・
タナー

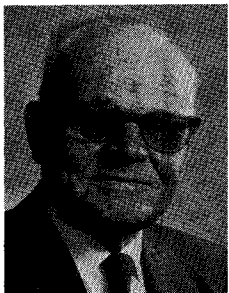


14さいのときのことです。ワード部のある人が亡くなりました。父は監督だったので、葬式の準備に出かけようとしていました。父はわたしたち兄弟を呼んで、留守中にある仕事を

行なうようにと言い残して行きました。父はしばらくはもどってこないだろうと思っていたので、仕事はあとまわしにすることにしました。遊びに熱中していると、父の呼ぶ声が聞こえま

じゅう分の一を おさめる

第二副管長
マリオン・G・ロムニー



わたしの家族はメキシコからのがれてきました。おじの家族といっしょだったので、とても大人数でした。メキシコを出るときには、トランクひとつ以外、何も持ち出すことができませんでしたから、合衆国での生活は楽ではないということがわかっていました。それでもおじの家族と助け合ってなんとか暮らしていきました。

アイダホにいたときのことで、おじが失業してしまいました。そんなわけで、父が学校からもらう80ドルというわずかなお金で、17人が1ヵ月食べてい

かなければならなくなったのです。17人分の食べ物ほかに、部屋代や燃料費もまかなわなければなりません。わたしは、燃料を得るために、丘に登り、雪の中からよもぎの枝を掘り出したものです。そうすると火にあたらなくても体がぽかぽかしてくるのです。

家族会議でひとつの問題がもちあがりました。80ドルしか収入がないのに、じゅう分の一をおさめるべきかどうかということです。おさめなければそれぞれの家族が40ドルずつ使えますが、おさめれば、36ドルになって

ペンサーは言い返しました。

「お父さんはいないよ。プライマリーには行けないよ。」

そして兄たちは、スペンサーの頭に干し草をかぶせました。しかし、スペンサーは荷車のうしろからそっとはい出し、教会に向かったのです。こうして、スペンサーのプライマリー無欠席の記録は守られました。

主が望んでおられることを行ないたいという固い決心は、のちにスペンサーが宣教師となった

ときのできごとにもよくあらわれています。

キンボール大管長は熱心な宣教師でした。セントルイスで伝道していたある日のことです。半開きになっているドアの奥にある真新しいピアノが目に入りました。そこで、ドアを閉めようとしている婦人に話しかけたのです。「新しいピアノですね。」

「ええ、届いたばかりなんですよ。」その婦人はほこらしげに答えました。

「『キンボール』ですね。私もキンボールなんですよ。」婦人がドアを大きく開けると、キンボール大管長は続けて言いました。「ちょっとお弾かせ願えないでしょうか。」

「どうぞ、お入りください。」

そしてキンボール大管長はピアノに向かうと、「高きに栄えて」を弾きながら歌いました。こうして、福音について話すきっかけをつくったのです。

注：「キンボール」は合衆国のピアノメーカーのひとつ。

した。しかられるな、とかくごしていたのに父はしかりませんでした。ただこう言ったのです。

「おまえを信頼していたのに。」このことばはわたしの胸をちくりとさしました。そのとき、わ

だしは、父に二度と同じことを言わせないようにしようと心に決めたのです。

そして、また主から「わたしはエルドン・タナーを信頼していたのに」と言われないうに

しようと決心しました。この経験はいつもわたしのささえとなっています。

しまいます。わたしはそのときのことを今でもよく覚えています。わたしたちはおさめることを決めました。寒い中をオーバーも着ずに監督のところへじゅう分の一を持っていきました。お父さんはどうしてこうしたのだろうと、わたしはいろいろ思いなやみました。でも、両親のおかげで、そこからひとつのことを学びました。それは、主の約束は必ず果たされるということです。

じゅう分の一の律法を守って生活すれば、すばらしい気持を味わうことができます。わたし

はそれを知っています。結婚した当時、わたしは一日8時間郵便局で働きながら、法律を勉強していました。そんなとき、子供を失ったため、出費がかさみました。しかも、わたしは郵便局をやめ、弁護士を開業することにしたため、9月は失業の状態でした。政府の失業手当を受けたのも11月になってからでした。そんなわけで、じゅう分の一を何ヵ月かおさめなかったのです。わたしはいやな気持ちでした。そこでおさめていない分を8パーセントの利息付きで、分割払いにすることにしたので

す。払い終わったときの喜びは、何とも言えないものでした。主はわたしを理解してくださり、わたしの捧げ物を受け入れてくださったことがよくわかります。

主イエス・キリストの使徒としてあかしします。じゅう分の一を正しく、おしみなくおさめる人には、平安となぐさめとまもりが与えられます。収入がいくらあったかわからないときには多めにおさめるようにしましょう。少ないのより多めの方がいいのです。



草原の キリン

おはなし：マーリ・プリングル
イラスト：ディック・ブラウン



数年前、南アフリカのケニアに、600マイル（約960キロ）にわたってはじめて電線がしかれたときのことでした。1時間もたたないうちに、ナイロビのかんり局に、電線が切れたという知らせが入りました。

調査に出かけようとしているふたりの若者に、むかしハンターだった老人がにやにやしながら言いました。「きみたち、めんどろなことになるよ。」

「じょうだんじゃないですよ。は、電線を低くはりすぎるって、

わずか1時間で切られるなんて、反対者のしわざですよ。」若者は荒々しく答えました。

「なんてこった。」老人はあきれ顔で言いました。「きみたちはターザンの映画を何度となく見とるだろう。それなのに、キリンのしわざだっていうことがわからんのかね。キリンっていうやつは、自分が進む方向を見る前に、首はすでにそっちを向いているからな。だから、わし

きみたちのボスに言ったんだよ。」

ふたりの若者は、そんな老人のことばには耳を傾けようとししないで、さっさとトラックにのりこみ、走り去りました。

数マイル行ったところで、電線の切れた場所を見つけました。それは原住民のしわざではありませんでした。キリンが3頭、苦しそうにもがいていました。助け出そうとしたときには、ショックで死にそうでした。

この事件があつてから、かんり局では、年をとったハンターのちゅうこくに從つて、電線を10メートルの高さにはるようになりました。それ以来、背高のっぽのキリンによる事故は起こりませんでした。

変わったことがめずらしくないこのケニアの国でも、キリンはユニークな動物です。中には6メートルもあるキリンもいます。これは首が長いのですが、首の骨は他の動物と同じで7つしかありません。足は4本ともほとんど同じ長さです。おすのキリンの中には重さが1トンをこえるものもいます。めすはおすよりも背が1メートルくらい

低く、重さは450キロていどです。

キリンは、からだは大きくても荒々しい動物ではありません。かつてはアフリカ大陸にはキリンがたくさんいましたが、人が食用にしたり、皮を利用したりするようになってからは、その数は急に少なくなりました。キリンの皮はとてもじょうぶで、中には、2.5センチもあるものもあります。これは馬具やたずな、むちなどを作るのに利用されました。また強いすじは、弓のつるや楽器に用いられます。

キリンの長い首は事故の原因となる一方、高いアカシヤの木の葉を食べるのに便利です。キリンのくちびるを見てみましょう。長くて、ものがつかみやすくなっていて、けがをしないように毛がはえています。舌は50センチもあり、これで葉や枝をじょうずにむしり取ります。

キリンは背が高いため、場所によっては立ったままでねむります。立ったりすわったりするのに時間がかかるので、敵からのがれるときには、立ったままでねむる方が安全なのです。し

かし、時にはすわり、首をうしろにまわして、腰の上に頭をおいた変なかつこうでやすむこともあります。

キリンは集団生活を好む動物で、5～20頭くらい群れをなしています。密林や沼地などをさけながら、あちこち歩きまわります。沼地に入ると、重みでからだの動きがとれなくなってしまうからです。

年をとったおすがリーダーをつとめます。しかし、子どもや群れ全体を見守るのはめずです。キリンの目と鼻はとてもすぐく、危険をいちはやく知ることができます。

水たまりには安全をたしかめるまでは近づきません。1週間8リットルくらいの水を必要としますが、木の葉から水分をとることができますから、少しくらい水がなくてもだいじょうぶです。

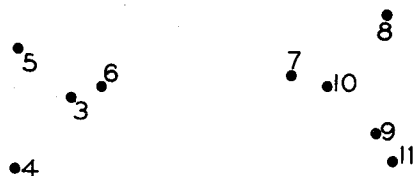
キリンは頭で戦いをします。頭で打ち合いをしているキリンは、4メートルのえの先に4キロのおもりをつけた大きなハンマーのようです。強いキリンはこの大ハンマーをじょうずによ

けます。頭にあるふたつの短い「つの」のようなもので相手のパンチを受け流し、やわらげるのです。

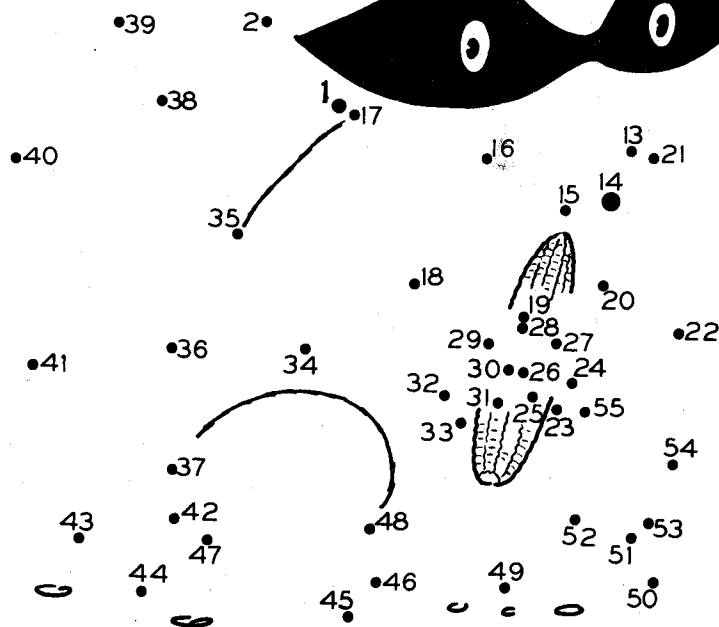
声を出さずに戦いがおこなわれるというのは、おもしろいことです。どんなにはげしいけんかのときも、ただ物悲しいまなざしで、相手をみつめているだけです。これまで、キリンは声を出さないといわれていましたが、これはまちがいです。低いモーという声を上げたりすることもあるのです。

キリンは朝と夕方にえさを食べ、日中は休みます。アカシヤの木のかげでじっとしていると、キリンがいることなどまったくわかりません。陽がしずむと、活動開始です。夕ぐれの草原を全速力（時速50キロくらい）で、ゆうがに、リズムカルに走りまわっているキリンを見ることができます。

もし、草原からキリンが姿を消すようなことになったら、アフリカは大切なアフリカらしさを失うことになるでしょう。



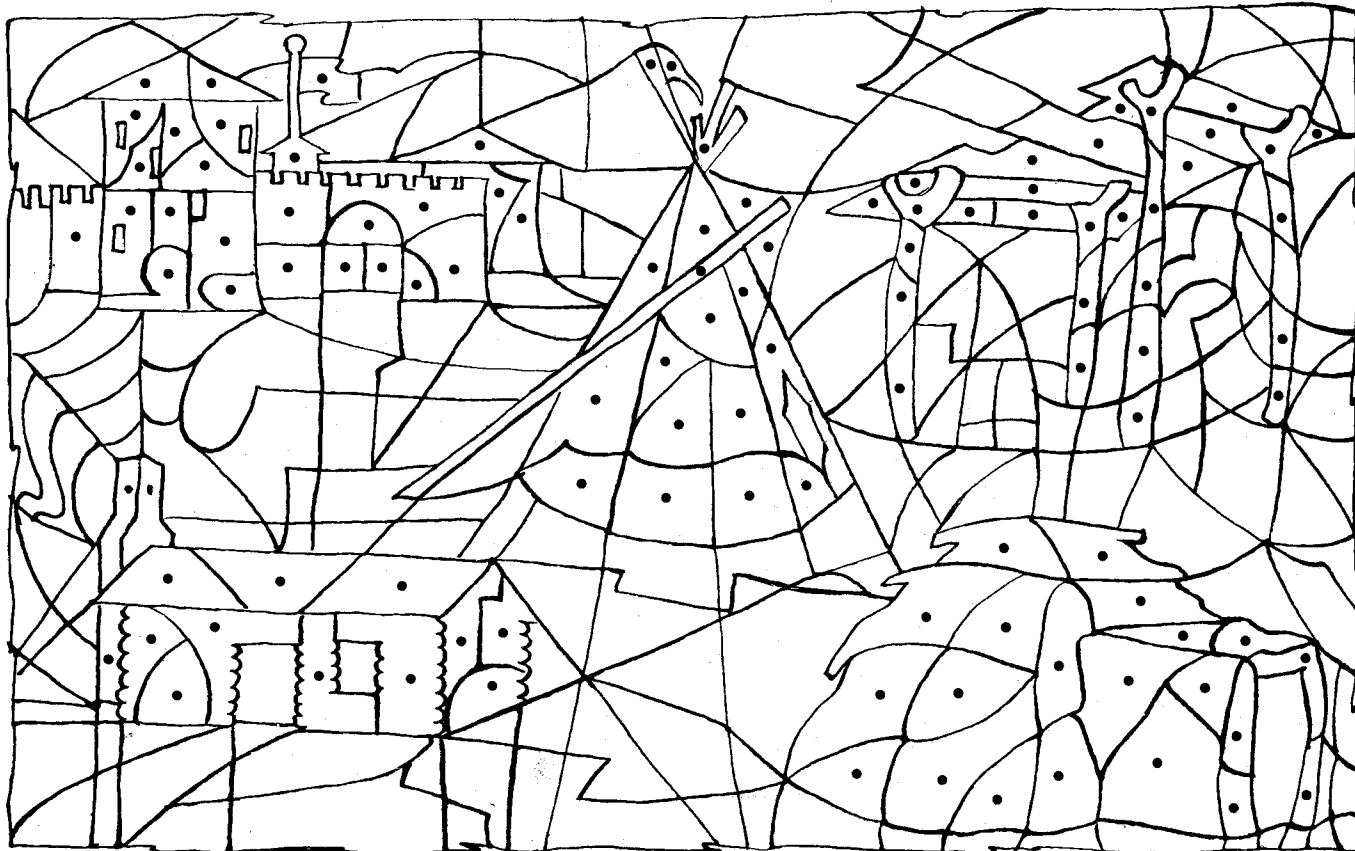
おもちゃばこ



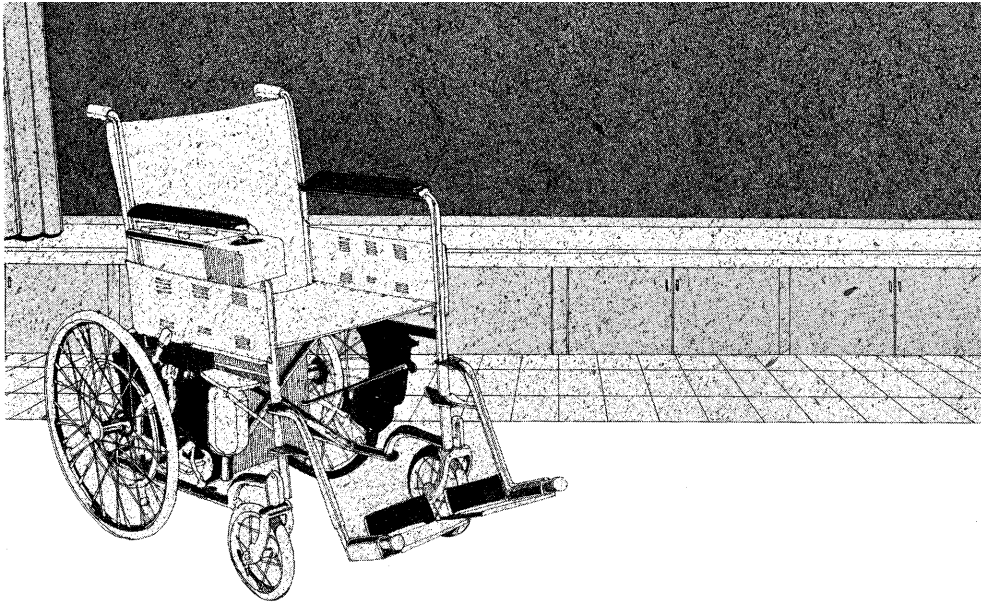
てんをむすんでみましょう
なにがかくれているのかな？

ロバータ・フェアラル

まふいりや：そみこ



てんのところを、ぬりつぶしてみましょう



スティーブン

お話：ベーン・ホートン

絵：エド・ホームズ

「私の証を述べたいと思います。私は、天父が多くの祝福を与えて下さっていることを心から感謝しています。」

礼拝堂の後ろの隅から、こう証する声が聞こえてきた。ワード部の会員には耳慣れた、証会でよく証する人の声であった。

たまたまこのワード部を訪問していた人がその声のする方を振り向いた。車椅子にもたれかかった少年であった。力のない足をだらりと下げ、やつれた体を両腕で支えて、車椅子に寄りかかっている。このひどい身体障害者が多くの祝福に感謝している？一体、どんな祝福だと言うのだろうか。

スティーブンは4歳のとき、たび重なる検査の末に進行性筋無力症と診断された。医師は、このまま病気が進めば命はあと8年しかもたないと宣告した。

「病院ではっきりそう言われたとき、私たちはとてもその言葉を信じるのができませんでした。」母親は当時を思い出しながら話を続けた。「スティーブンは、それはいろいろなことのできる子供でした。私たちは、ただあの子が何でも自分でできるように力づけてやるだけでした。あの子は、ほかの兄弟と同じようにきちんと家の仕事をしたんですよ。そのうちに、足のすじ

がひきつって、つま先で歩かなければならなくなってからは、それまでの仕事をいくつか取り除いてやりました。でもそれに代わる仕事を与えましたよ。普通の子と同じ学校に行って、自分でできる範囲のことは何でも自分でましてね。

あるとき、先生がこうお話し下さったことがありました。先生は、スティーブンとある転入生を同時にお呼びになりました。ところが先生のところに行ったスティーブンは、片手を先生の机に置いて、足をぎゅうっと踏んばっていたんだそうです。それを見た転入生が『君、大丈夫かい？』と尋ねたら、『僕の足は止まるのがきらいなんだよ。だから言うこときかせるのに一苦勞さ。でもありがとう、僕は大丈夫』とスティーブンは答えたんですって。

スティーブンにとって、椅子に腰掛けるのは容易なことではなかった。12歳まで、椅子の上にひざをついて授業を受けたために、ひざにはたこができていた。しかし彼には、自分にできることは何でもしているという自信があった。ほかの子の仲間入りするのに、自分のできることは何か、彼は常にその方法を見出した。翌年、クラスでスクエアダンスを学ぶことになった。ほかの人がダンスをする間、図書館で本

を読んではどうかという教師の言葉に彼はこう答えた。

「でも、僕にもさせてほしいんです。」

「どうやってするの？」教師は驚いて尋ねた。このときすでにスティーブンは体の重心を取ることができず、壁につかまらなければ歩けない状態だった。

「僕、考えたんですけど、レコードをかけたり、みんなが踊るのを見るくらいのことは僕にもできると思うんです。そうすれば先生の手間も省けてじっくり教えることができるでしょう。」先生は、スティーブンの言葉を受け入れた。

「僕はたくさんの祝福をいただいています。本当に感謝しています……」

高校時代、バスケットボールの試合の記録係をしたこと、女子体操チームのマネージャーをしたこと、学校新聞の編集に携わったこと、生徒会のいろいろな責任に選ばれたことなどを、彼は祝福の一部としてあげている。会計係に立候補した彼は、演説の中で次のように語った。「私は必ずこの責任を立派に果たします。皆さんが私を一目御覧になれば、お金に足がはえて逃げていってしまう心配が全くないことをおわかりいただけると思います。」彼は会計係に選ばれた。

スティーブンの活動は学校内に留まらなかった。彼が8歳のとき、家族全員が末日聖徒イエス・キリスト教会に加入した。それからのスティーブンは教会のプログラムに活発に参加するようになった。初等協会から、カブスカウト、ボーイスカウトへと活躍は続いた。神権の職も昇進し、聖餐のパスも行なった。しかしある日パスの最中によろけた彼は、その日以来その責任を行なわなくなった。その夜彼は日記に次のように記している。「聖餐のパスをするとき、よろけてしまった。何もこぼれはしなかったが、もう二度と同じ危険を冒さない方が良くかも知れない。みんながどれほどはらはらしているかわからない。」それ以来、その責任がまわってくると、彼はほかの執事に代わってもらうことにした。教師の職にあった彼は、隣の小さな部屋で聖

餐の準備を手伝い、定員会書記の務めも果たしたのである。

またスティーブンは、セミナーに出席するために、4年の間週日は5時半に起床した。2年間は1日も休まず通いとおし、もう1年はたった1日休んだだけであった。後の1年は演劇祭参加のため、やむなく早朝セミナーを4日欠席した。

「たくさんの祝福を与えて下さる天父に感謝したいと思います……」

友だちが増え、活動範囲も広がるのと平行して、彼の病気も進行した。首の筋肉がきかなくなった。そのために頭を支えることができず、頭はだらりと後ろに倒れた。壁づたいによろよろと廊下を歩く彼は、数歩進むと立ち止まらなくてはならなかった。先に何かがあるかをいちいち確めなければならなかったのである。

そのような彼を見て、人々はあれこれと口をはさんだ。中にはわざわざ彼のところにきて、「どうしてそんなかっこうしているんだい」とか「どうなさったんですか」と言う者もあった。また時にはレストランでの彼を見て、何と行儀の悪い子供だろう、ひとりでそんなに席を取らずにちゃんとすわってはどうかとやかましいことを言う人もいた。

そのようなとき、スティーブンは悲しい思いをしたであろうか。

「いいえ、そんなことはありません。わざとこんなことをしているのでないことがわかれば、だれもそんなふうには言わないでしょう」

兄のジェームズは、スティーブンを肩に背負って連れ歩くようになった。

「勇気を奮い起こして下さい。あなたの兄弟は今や、あなたと同じく、天父のみ業に出て立たんとしているのです」

ふたりは楽しそうだった。しかし人々は、事態がいかに深刻かを知る由もなかった。例えばスティーブンを学校から帰るとき、ジェームズは少し後からやって来て、スティーブンをいきなりかがえ上げ、そのままかけ出す。スティーブンは叫び声を上げるので、道端の子供たちがハチの子のように逃げまわる。そうこうしながらふたりは家

に戻って行ったのである。

またジェームズはスティーブンを背負ってよくショッピングセンターに出かけた。しかし、人を背負って店内を歩くことは許されていない。ところがスティーブンは、ほとんどの保安係と友だちになり、とうとうショッピングカートを特別にあてがってもらうまでになった。

「スティーブンは、ほかの人のことをとてもよく考える子でした。ですからいろいろな人と友だちになりましてね。あるときこんなことがあったんですよ。ショッピングセンターであの子が、『ねえ、お母さん、あっちへ行こうよ。僕、あのひとと話がしたいんだ』って言うんです。その人のところに行くと、昇進おめでとう、今度はどんな責任ですかって尋ねましてね。実は、と話しながらふたりの話がはずんでいったんですよ。後で、息子にどうして昇進したことがわかったのと聞くと、『制服のそで口に金モールがついているんだ。あのひと、先週は1本だったのに、今週になったら2本になっていた。それで昇進したってわかったんだよ』って言うんですよ」

スティーブンは、成功を取めた人や問題をかかえた人に細かい心配りをする少年であることはよく知られていた。彼の友だちは次のように語っている。

「中学のとき（この頃スティーブンの病状はかなり悪化していた）、問題があればいつでもスティーブンのところへ行けばよかったんです。彼は、自分のことよりまずほかの人の問題を心に掛けてくれました」

また、ある友だちはこう語っている。「彼はいつも楽しそうでした。そして自分のことを二の次にする人でした。ほかの人を助けることの方が大切だと考えていたのです。毎日だれかを助けていました。彼は、天父のみもとに帰ればそれでいい、自分のためにはそれに必要なことだけすればよいと思ってたんですね。本当に素晴らしい人でした。ああいう人はめったにいないんじゃないかと思います。彼は『自分をあまやかすわけにはいかない』と言い聞かせるようにしてがんばっていま

した」

「天のお父様に心から感謝しています……」

彼は、兄や姉とともに劇を作り上げた。ふたりが役者で、スティーブンは演出、音響効果、照明係を務めた。スティーブンは高校生のときであった。この劇はロードショーで上演された。

スティーブンを身体障害者だと思ふ人はひとりもいなかった。しかし家族の人は、彼にはできないことがあることを知っていた。姉は友だちのひとりに次のように話している。「スティーブンは走ることが苦手、私は絵を描くのが苦手、ジェームズは音痴なのよ」フェランス家の人々は、スティーブンの生活を通して、彼に対してだけでなくすべての人々に思いやりを示すことを学んだのである。

スティーブンは常に成績最上位で進級を続けた。しかし高校2年の頃からは、体を動かすことと生きることが勢一杯の毎日となり、成績も中の上程度になった。彼は、高校時代生徒会から毎年、年間最優秀生に選ばれ、奨学金を授与された。高校3年のときには、青少年名誉賞と奨学金を受けている。さらにスティーブンは、学校ラジオ放送の早朝1時間番組で活躍した。

教会においても、定期的に説教壇に立って話をし、いろいろな責任を果たした。スティーブンは、ワード部の会員から愛され、力づけられた。一方会員たちはスティーブンをみて勇気を奮い起こした。彼はアロン神権MIAの書記を務める一方、インスティテュートクラス副会長の責任も果たした。

彼はまた、伝道プログラムにも援助を惜しまず、よく長老を家に招待した。兄のジェームズが宣教師の召しを受けた日、スティーブンは自分のことのように胸を踊らせた。喜んで兄の伝道準備の手伝いをした。また伝道本部入りするジェームズを送りにソルトレークシティまで旅行できることを、心から喜んだ。スティーブンは、自分も伝道に出られると固く信じていた。そのために熱心に勉強し、準備をした。祝福師の祝福文の中には、彼はやがて伝道に出ると述べられていた。ちらしを

配るといような大変なことはできなくても、きっと自分にできることがある、彼はそう確信していた。

しかしスティーブンの体力は、日に日に衰えて行った。彼の体は増々曲がり、とうとう胸がひざにつくほどに折れ曲がってしまった。椅子にもたれて、寝ては目覚める日々が続いた。しかしスティーブンは不平ひとつ言わなかった。あるがままを受け入れたのである。

ニューウエストミンスターワード部のロードショーの脚色、演出が、彼の最後の仕事となった。ブリティッシュコロンビア州のバンクーバースターキ部は、全ワード部を集めた合同ロードショーを企画した。審査の結果、スティーブンの脚色、演出したロードショーが、「最優秀演劇賞」を獲得した。

拍手かっさいが静まると、司会者がマイクrophonに近づいて、次のように語り始めた。「最優秀賞に輝くロードショーを脚色、演出したスティーブン・フェランスは、けさ息を引き取りました。私たちは、審査に影響を及ぼすことのないよう、今までこの悲報をお知らせしませんでした。出演者とスタッフの方々に、また特にこのような見事な作品を残したスティーブンの御家族に、心からおめでとうと申し上げたいと思います。本日のすべてのロードショーをスティーブンに捧げます。」

「彼の家族がこの場にいるなんて、どういうことですか」と言った者があった。ある人がこう答えた。「今までスティーブンをあんなに一生懸命育てたんだ。一番のはなむけはこのロードショーを見てあげることだよ。」

「私の証を述べたいと思います。私は天父が多くの祝福を与えて下さっていることを心から感謝しています。…私は復活したら、完全な健康体をいただくことができることをはっきりと知っています。また、神が生きてましまし、イエスがキリストであること、ジョセフ・スミスが予言者であることを知っています。これらのことを知ることができたことを心から感謝しています。またこの教会の会員であることを感謝しています……」

スティーブンは、鋭い洞察力と愉快

なユーモアのセンスと、問題を適確に識別する能力に恵まれていた。彼は、これらを駆使して18歳の生涯を完了した。彼は決して超人間的な少年でもなければ、徳の化身でもなく、ましてや聖人などではなかった。人生の浮き沈みを味わい、好き嫌いを持った、心温かく、愛に満ちた、ごく普通の人間だったのである。

末日聖徒の多くの青少年が、2年間の伝道活動の門出に、ソルトレーク・シティにある伝道本部に入る頃、スティーブン・フェランスは地上における彼の使命を完了した。天父は、純粋な愛の世界から彼を送って私たちに従うべき模範を示されたと言えるのではないだろうか。私たちの中には、肉体的にではなく、精神的にある程度片わになっている者がいないだろうか。また私たちは、お互いに力づけ合うことを必要としてはいないだろうか。彼の使命とはまさにこのことを私たちに知らせることではなかったであろうか。

かつてのスターキ部長は、スティーブンの兄、ジェームズに宛てた手紙の中で次のように語っている。「私は、スティーブンがあなたに続いて伝道に出ることを心待ちにしていました。そして今、彼はその召しを受けました。彼は福音を宣べ伝えるために、人並み以上の準備をしました。ですから見事に伝道活動を完了することでしょう。彼はもはや今後の伝道活動において、肉体の障害のために重荷を背負うことはないのです。彼は今、胸を張って立ち、あなたのように、力と確信を持って福音を宣べ伝えるために歩み出すことができるのです。勇気を奮い起こして下さい。あなたの兄弟は今や、あなたと同じく、天父のみ業に出で立たんとしているのです。」

ブリティッシュコロンビア州バンクーバースターキ部では、スティーブンの追悼式が行なわれた。友だちは花を贈る代りに、彼が通っていた高校にその名を残す奨学資金を設置するために献金を行なった。その結果毎年、「他の青少年を助けるという分野で著しい貢献をし、真の博愛精神に則り、召しに伴う責任以上の働きをした」卒業生

に、百ドルの奨学金と「スティーブン博愛賞」が贈られることになった。

またブリティッシュコロンビア州バンクーバースターキ部は、「スティーブン・フェランス記念スポーツマンシップ賞」を設け、年に一度の聖句さがし大会で、お互いに最も良く関心を示し、規則に注意を払い、熱心に努め、立派なスポーツマンシップを示したセミナリーチームにその賞を贈るようにになった。

追悼式には、スティーブンをしのんで多くの教会員、非教会員が集まった。学友のひとり、学校や学生仲間に対して、スティーブンがいかに貢献したかを話した。またスティーブンが多くの才能に恵まれていたこと、どんなに他人への奉仕に熱意を示していたか、さらに生徒会で示した模範の数々を語った。祭司アドバイザーは、教会におけるスティーブンのめざましい働きや自分が参加できないのを知りながら野外活動に並々ならぬ熱意を示したスティーブンについて、また神権者に対する彼の関心の深さについて語った。監督は、スティーブンが霊的にどれほど高い水準に達していたかを話した。また、集まった多くの人々に、スティーブンの強い証と、彼がいかにあらゆる機会を利用してその証を述べたかを思い起こさせた。さらに自分のできることなら何でもして主に仕えたいというスティーブンの望みについても語った。スティーブンの愛によってその場に集まった教会員、非教会員は、改めて、彼が性格的に多くの優れた面を持っていたことを知った。

スティーブンは、18年の生涯を生き抜いた。そして多くの事柄をなし遂げ私たちに素晴らしい模範を示した。身体的な欠陥を背負い、多くの苦痛にさいなまれたスティーブン。しかし死の床についた彼は、まさに救い主が信仰ある者に約束された姿そのものだったのである。

「われにありて死ぬる者は死を味わうことなし。そは死は彼らにとりて甘ければなり。」(教義と聖約42:46)

教会幹部の妻

アイダ・ジェンセン・ロムニー

モーリン・ジェンセン・ワード

子供に土地や見事な家宝の陶磁器を遺産として残す親がいます。でも教会の第二副管長マリオン・G・ロムニーの妻、アイダ・ジェンセン・ロムニーが親から受けた遺産は、それよりはるかに価値あるものでした。彼女は、子供のときに夕食の席で聞いた先祖についての話の中から、福音という豊かな遺産を受け継いだのでした。

「母方の祖母はデンマークの北部の生まれです。祖母にはマイナという姉がいて、町の末日聖徒の家に働きに出ていました。当時モルモンはデンマークでは受けがよくありませんでしたが、マイナはその家族と一緒に日曜日に教会へ行きました。

マイナは教会である讃美歌が好きになり、それを覚えて帰って、家事をしながら歌っていました。間もなくマイナはバプテスマを受けました。けれども、モルモンになったことは家族のだれにも黙っていました。ある日彼女は家で、大好きな歌を歌っていました。讃美歌『高きにさかえて』です。そのときマイナのお母さんが歌詞を黙って聞いていて、『どこで覚えたの。私もその歌詞の通りだと思うわ』と言いました。マイナは自分がモルモンになったことを説明しました。それから間もなく、家族全員がバプテスマを受けたのです。

この小さな家族はわずかな持ち物を携えて、デンマークからユタへ出発しました。」ロムニー姉妹はさらに続けます。「マイナはシオンを見ずに荒野で死にました。でも大勢の子孫は、彼女の証に言い尽くせない感謝の気持を持っています。彼女がいなかったら、今の私たちはここにいないのですから。」

ロムニー姉妹の祖父もデンマーク出身です。

「祖父は青々として豊かに潤った農地を残してシオンにきました。シオンに住むことがどんなに素晴らしいか、それにシオンに来れば40エーカー（約16ヘクタール）の農地が与えられると宣教師から聞いたのです。祖父はユタ州の南にあるレーバンに送られ、残してきた肥沃な土地とは似ても似つかない土地に入植しました。すぐにでも馬車に乗ってデンマークに帰りたいと思いましたが、祖母がそれをひきとめました。

私たちは教会のために犠牲を払わなければいけないと教えられてきました。主が私たちに求められることは、たとえそれで生涯を終えるとしても、価値のあることなのです。

祖母は死の間際に家族を枕元に呼んで、『いざ救いの日を楽しまん』の歌を歌ってくれるようにと頼みました。そして最後に、福音は真実であるとの証を残し、『教会員として一生が過ごせてうれしい』と言って息をひきとりました。」

アイダ・ロムニーはユタ州レーバンの祖父母が入植した町で生まれました。両親は、福音のために犠牲を払うという伝統をそのまま伝えていました。アイダが6歳のとき、父親にユタ州ソルトレーク・シティー私書箱Bから薄っぺらな1通の手紙が届きました。それは妻と3人の子供を残して北部諸州伝道部で働くようにという、大管長会からの召しの手紙でした。

「『父さんは15ドルと黄色の牛を残して出かけた』と母が話してくれました。母は家族を養うため父に代わって働き、その上父に送金しました。また洗濯とアイロンかけをし、病人の看護をし、近所の人の縫い物もしたのでした。

父が伝道から帰ったのは、私の8歳の誕生日のときでした。私は父の留守中に古いペダルオルガンが弾けるようになったので、母は父の姿が見えると、玄関に入って来る父に聞かせようと、私に『家庭の中に』を弾かせました。父は目に涙を浮かべ、2年ぶりに私たちを抱きしめました。

父が伝道から帰って間もなく、家族はワサッチ郡に引越して農場に住みました。近くに高校がなかったので、私たち姉妹はプロボのブリガム・ヤング高校に通いました。私は教師になりたいと思っていました。

私たちは借家に住み、母が毎週『ヒーバークリーパー』という車で食物の箱を届けてくれました。

私が教員免許を取ると、家族はアイダホフォールズに引越しました。」ロムニー姉妹が両親や祖父母の生活の標準となっていた証と同じ証を自分で得たのは、このアイダホフォールズにおいてでした。

「アイダホフォールズステーク部の日曜学校管理会の一員に召されました。私の責任はワード部日曜学校の教師た



ちにレッスンの仕方を教えることでした。管理会にはアイダホ大学の卒業生がおり、その奥さんも大学卒でいつもふたり一緒に私のクラスに出ていらっしゃいました。彼女は教会員ではありませんでした。

ある日、ジョセフ・スミスの見神のレッスンをする準備を始めると、その女性のことが頭に浮かんできました。それまでは彼女がクラスに出ても動揺したことはありませんでした。そのときは急に、彼女がいる場でそのレッスンをするのがこわくなりました。

『彼女は大学出の教養のある方だわ。彼女のいる場でど

んなふうに話せばいいのかしら。きっと気が変だと思われるわ』と考えました。

私が母のところへ行って、『私、レッスンできないわ。本当かどうかわからないもの』と言うと、母は『まあ、何を言うの。あなたは本当だということがよくわかっているのに』と答えました。

私は、『ジョセフ・スミスが示現を見たって教えられてきただけよ。本当だということはわからないわ』と言いました。私のこの言葉に母は驚き、泣き出しました。やがて母は言いました。『どの教会が正しいのか知りたいと思っ

たとき、ジョセフ・スミスはどうしたかしら？ あなたもそうしなくてはいけないわ』と。

ロムニー姉妹は話を続けました。「私は二階に上がると、これまでにないお祈りをしました。『教会が真実であることを理解させて下さい。どうか自分でわかるようにして下さい。私だけのためではありません。証を人に述べなければならぬのです』と言いました。」

その日曜日はそれまでとは違ったレッスンができました。ただ言葉を繰り返すだけではありません。自分は今、真実のことを話しているんだという自信がありました。」

ロムニー姉妹は教室に決して不慣れではありませんでした。アイダ・フォールズやリックスカレッジで1年以上も教鞭を取りましたし、ユタ州立大学やブリガム・ヤング大学やユタ大学で修士号をめざして勉強もしました。

アイダ・ジェンセンとマリオン・ロムニーが初めて会ったのは、彼が伝道に出る前です。アイダ・ホ州・レックスバーグでのことでした。そして、アイダが伝道に出る、いどこに別れの挨拶に行ったときが、2度目の出会いでした。ふたりは1924年9月に結婚しました。

「新婚当時、マリオンは大学の法学部に通っていたので、お金がありませんでした」と彼女は言います。

「私たちの楽しみはソルトレーク劇場に出かけることでしたが、2枚一緒に切符が買えないことがよくあって、ひとりは最上段の席、ひとりはメインフロアと離れ離れにすわったものです。帰りに10セントを出して電車に乗るのもまれなことでした。」

アイダ・ロムニーは夫の話になると目を輝かせます。今もなお恋人同士の仲むつまじいおふたりなのです。彼女は毎日夫からの電話を楽しみにしています。ロムニー兄弟はどんなに忙しくても仕事先から電話で愛を伝えます。一方姉妹は、新聞や雑誌から兄弟の好みそうな記事を切り抜いて、夜帰ってくると彼に読んであげます。

「よくふたりで一緒に笑います。主人は私の一番大事な人です。」

ロムニー夫妻は好一对です。お互いの口に出さない感情にもよく気がつきます。

「何年も前、私たちが結婚して間もなく、マリオンの仕事もまだ着落かない頃、友人たちから選挙運動を頼まれま

した。次の党大会の代表者になって欲しいということでした。おもしろそうだったのですが、私は夫に相談もせずに断りました。それより前、ある晩話の最中に、夫が『僕はロムニー姉妹の御主人と言われるだけか』と冗談を言ったことを思い出したからです。そのときはただ私をからかっただけなのですが、そんなふうには決して感じて欲しくないと思いました。」

アイダ・ロムニーの考え方や表情や判断、経験から、彼女が霊的に円熟していることがよくわかります。彼女の人生は陽の当たる日ばかりではありませんでした。最初の子供は生まれてすぐに死に、彼女自身背中を痛み、最近はず中を患いました。

「私の問題なんて小さなものです。主が近くにいらっしゃることを知ってますから。『私のことをご存知ですね。私の問題もご承知ですね。では、それを受け入れることができるようにして下さい』と私は主にお願いします。」

だれだって人生の浮き沈みにあわないという保証はありません。私たちは皆、何かの苦勞に耐えなければなりません。私たちはいずれは死にます。必ず死に直面します。『あなたの信仰はどれほど深いか』という静かな問いを聞くのは、そういったことに会うときです。

孫たちが夏の土曜日に水上スキーに行きます。私は一日中家にいて心配していたのですが、ある日マリオンがこう言いました。『孫たちを、君はどうしたら守ってあげられる？ 主にすっかりお任せしてあるんだ。君の信仰の深さはどれほどかな』

ロムニー姉妹は信じています。「何でも最善を尽くしたら、その結果を受け入れることができます。主を信頼しなければいけません。」

これまでの長い人生の中で、世界は大きく変わりました。私が生まれた頃は馬車で旅行をしたものです。電話もなければ車もない。そういう時代から今もずっと変わらないのはたったひとつ、世にはいろいろな問題がありますが、主は平安を下さるということです。」

(モーリン・ジェンセン・ワード　ウィルメット・イリノイステーク部シカゴワード部扶助協会会長、2児の母)



積極的な人生

十二使徒評議会会員
リグランド・リチャーズ

人生において何か価値あることを成し遂げたいと思えば、私たちはそれなりの目標を立てます。私は皆さん一人一人が建設的な事柄を目指されるように望んでいます。

参考までにこれから2, 3の例をあげてお話ししましょう。今からちょうど2, 3年前のことです。そのとき私は北アメリカの西海岸沿いの伝道部を管理していました。この話を耳にしたのはアラスカ・カナダ伝道部にいたときです。

高校生だった伝道部長の娘はひとりの友人を教会に導くことに成功しました。そこで夏休みがやって来ると、彼女は父親に夏休みの間伝道したいと話しました。彼女はサマー・ミッショナリーとして夏休みの間だけ伝道する機会を与えられ、アンカレッジに送られました。バプテスマ会が行なわれたときのことで、伝道部長も私もその会に出席していました。11人の人がバプテスマを受けたのですが、そのうち9人は何とこの少女とその同僚の改宗者だったのです。その中には、将来教会の立派な指導者になれるような男性もひとりいました。バプテスマ会が終わると、伝道部長の娘は私のところにやって来て、目に涙をいっぱいためながらこう言いました。「リチャーズ長老、こんなにうれしいのは生まれてはじめてです」 夏休みの間宣教師になって伝道したい、何と素晴らしい目標でし

よう。天に宝を積みみたいと望めば、このような報いがあるのです。

次は、私がカリフォルニアでステークキ部長をしていたときの話です。ある若い兄弟が監督から夏休みの間伝道してみる気はないかと聞かれました。彼は医学を勉強していましたが、監督の勧めに従って伝道することにしました。どうしたと思いますか。彼は高校時代の仲間のところを回っては、こう言ったのです。「僕は教会から夏休みの間伝道するように言われているけど、全然準備できていないんだ。それで夜、暇なときでいいからちょっとだけ僕につき合ってくれないかな。そうすりゃ、僕も伝道の準備がよくできるんだけど」このちょっとした思いつきが、彼の4人の高校時代の友人を夏休みの間に教会に導くきっかけとなりました。どこにでも機会はあるものです。

イエスは、「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう」(マタイ6:33)と言われました。

これは、学校に行っていないもどこに行っても、どんなことをしていても、まず神の国を求めなければならないということです。この聖句を生活の指針とするならば、私たちはいつも真っすぐで狭い道を歩み続けることができます。そして最後には目指しているところに到達することができるのです。

福音は私たちの生活を変えます。数年前、リチャーズ姉妹と共にデンマークを訪問していたとき、私たちはスイス神殿から帰って来たばかりの若いカップルに会いました。そのとき、奥さん方からこういう言葉を聞きました。「リチャーズ兄弟、私たちは教会に入ってからまだ6年です。6歳になったばかりです。長老たちに福音を教えていたでいて、はじめて人生の意味がわかりました。」

オランダで伝道部長だったときの話です。ある夜、伝道本部の前を通りかかったひとりの兄弟が私の部屋に明りがついているのに気づきました。ちょうどホームティーチングを終えて家に帰る途中だったので、呼びりんを鳴らしました。私が応待に出ると、彼はこう言いました。「明りがもれていたものですから。私が道々何を考えていたか、リチャーズ伝道部長にも興味がおありになると思ったんです。私は宣教師の方が家に来て下さったときの自分と今の自分について考えていました。自分でもこれが同じ人間なのかと思います。習慣も違いますし、考えも違います。とても同じ人間であるとは信じられないほど変わりました。」

正しい望みに応じて、主が皆さん一人一人を祝福され、現世で価値あることを成就したいという志と希望を与えて下さるように。この地上に神の王国を築き、より良い世界を造りましょう。

「ふたりまたは三人が 集まっている所には」

(マタイ18:20)

ジェラルド・R・シェーファー

子供の頃、私の家では家族の祈りをしていなかった。それで、みんなが集まって祈るのを初めて経験したのは、祖父の家でのことであった。みんなでひざまずいて祈った。そのときの心地よさは、今でもはっきり覚えている。どういことなのかはわからなかったが、とにかく天父に語りかけていることと、このとき家族の中に調和と一致と愛があるということはわかった。私はこれまで教会のいろいろな責任で働くときに、そのときの一致の気持ちが大きな助けになった。

私が監督であったとき、ひとつのすばらしい経験をした。ワード部の若い人たちとのファイアサイドで、ひとりの少女から祈りを頼まれたときのことである。みんなで頭を垂れ、私はワード部の若い人たちがサタンの誘惑に対抗する力を得られるように天父に祈り、ワード部の父親、監督として祝福をした。この祈りの最後にみんなは完全に一致した愛の気持ちを持つに至った。イエス・キリストの福音が真実で、私たちが本当に神の子供であり、地上の生活には神

聖な目的と将来があるということを、みたまが再び私たちに証した。私たちの目には涙があふれ、一緒に祈ったことで目的の一致を強く感じた。

マタイは、救い主が弟子たちに教えられたことをこう記録している。「もしあなたがたのうちのふたりが、どんな願い事についても地上で心を合わせるなら、天にいますわたしの父はそれをかなえて下さるであろう。ふたりまたは三人が、わたしの名によって集まっている所には、わたしもその中にいるのである。」(マタイ18:19-20)

祈りはみたまを迎える手段である。救い主はさらに、教会が組織された数ヵ月後に予言者ジョセフに与えた啓示の中で、ひとつになるならば、願うべき祝福を願い、その求めるすべてはかなえられると教えられた(教義と聖約29:6; 50:29-30参照)。また私たちは、実際に集団の祈りをする前に自らを清めてへりくだり、聖霊の言葉が受けられるようにそれぞれが霊的な準備をしなければならないということを知った。



救い主はいわゆる『主の祈り』の中で、集団の祈りの立派な模範を示された（マタイ6：9－13参照）。ここで主は「わたしたち」という表現を使い、祈り手がみんなに代わって祈ることを示しておられる。

集団の祈りの目的はその人々がどういう人々であるかによって当然違う。しかしその第一の目標は、その場の全員が一致し、あるいは信仰をひとつにして特別な目標に向かうことである。

例をあげれば、ホームティーチャーの担当家族について考えると、ホームティーチャーと神権指導者は主の前にへりくだり、ひざまずいて一緒に祈り、またふたりのホームティーチャーも訪問の前に祈る。また、聖餐会や定員会集会で捧げる開会の祈りと閉会の祈りもそうである。ひとりが全員のために祝福を願う。夫婦の祈りも、それに子供を加えた祈りも集団の祈りである。毎日の初めと終りに宣教師が同僚とひざまずくのもそうである。神権役員会やステーク部長会、定員会会長会や扶助協会会長会、聖餐会、日曜学校、また総大会での祈りは、どれも集団の祈りで皆似ている。祈り手は、全員に代わって主の祝福に感謝し、祝福を願って祈りの言葉を言う責任がある。それはとりもなおさず、全員にとっての祝福がどういうものかを聖霊によって知ることができるように、謙遜になって、みたまと一致することである。ほかの人々も心の中で祈り手の言葉を繰り返し、同じ祝福を求めてみんなの信仰を一致させる責任がある。集団の祈りでこれを行なえば、「信仰をもてわれに願ひ、わが命に従いて共に祈るところは何にてもあれ汝らに与えられん」（教義と聖約29：6）という素晴らしい主の約束が実現するのである。

私の最も素晴らしい経験のいくつかは、集団の祈りによって得られたものである。

そのひとつは、ステーク部大会でステーク部長会とジェームズ・E・ファウスト長老との集会に出席したときの経験である。会の半ばで、分娩中のステーク部扶助協会会長が母子ともに死の危険にさらされているという一報が入った。その知らせを聞かや、ファウスト長老は全員ひざまずいて信仰をひとつにし、ステーク部長がその姉妹と子供の命が助かるように祈ることを提案した。それは、その親子のために主に願うというひとつの目的の下に、全員がみたまによって結ばれた貴重な体験であった。そしてその集会が終わる前に、母親も未熟児の男の子も助かったという知らせが届いた。

もうひとつ、感動的な集団の祈りを思い出す。それはハイシェラス山で行なわれたMIAガールズキャンプの証会でのことだった。このキャンプに先立って、私たちは反動的になっていたひとりのマイアメイドをあらゆる手を尽く

して説得し、やっとこのキャンプに参加させたのであった。そのキャンプの証会で開会の祈りをした少女が、靈感を受けて、「グループの中で証を持たない人たちが謙遜になって聖霊を受け、イエスがキリストであることとジョセフ・スミスが予言者であること、それに大管長が予言者で、この教会の福音が真実であるという証を受けられるように」と祈った。その祝福が得られるように心の中で主に祈り願ったのは、私だけでなかったと思う。

星空の下、高い松や杉の木を背景にしての証会是非常に霊的であった。そしてだれもが霊的に満たされ、目に涙していた。会の終り近くに、あの反抗的な少女が立ち上がって、今この教会は真実であるという証を聖霊から受けました、と霊の改宗を語ってくれたのである。彼女は、教会のすべての教えに従って神殿結婚ができるような生活をする約束した。それから数年後、私は彼女の神殿結婚後の披露宴に出席し、ハイシェラス山で目的と祈りをひとつにして大きな奇跡を見たことに、再び感謝の祈りを捧げたのであった。

またあるときに、私はステーク部長から頼まれて、長年反目しあっているふたりの兄弟たちと会った。私の助言が何の役にも立たないことはすぐわかったので、一緒に祈ってほしいとふたりにお願いした。私はひざまずいて主に話し、ふたりにも順番に祈りをお願いした。3人一緒に一致と赦しを求めて祈ったとき、わだかまりは消え、ふたりの兄弟たちは目に涙をためてかたくなな心を和らげ、共に主の王国で働く者の一致を感じた。

私はこれまでステーク部大会やワード部、あるいはファイアサイドの席で話の責任を頼まれてきたが、そのようなときは開会の祈りに注意深く耳を傾けた。たいてい祈り手は話し手に祝福があるように願う。そのとき、私はいつも心の中でその祝福が実現するように主に願った。祈り手が、話し手と聞き手の霊が通い合うように祈るときは、私もみたまが私を通して語ることを人々が受け入れてくれるように御父に願う。

集団の祈りが、どんな経験にも増して人を高める霊的な機会となることを、私は経験から知っている。集団で良い祈りをするには、祈り手の準備が大切であると同時に、対象となる人々が心を開いて祈りに臨むことである。

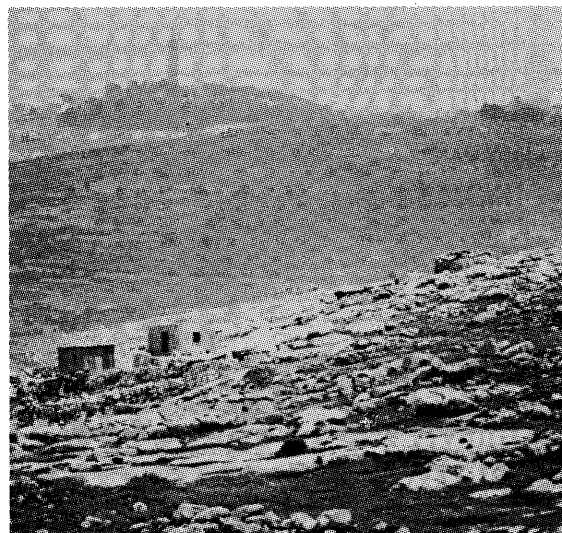
（ジェラルド・R・シェーファー 電子工学技師、現在は合衆国海軍軍属学術顧問、ノーフォーク・バージニアステーク部バージニア・ビーチワード部所属）

(「聖徒の道」1976年)
(12月号より続く)

(「四福音書」第32—44課)

注：最後の1週間の出来事は、エルサレム市内、あるいはその近郊でのことである。

1. 「基督イエス」 p. 593, 脚注32
2. 「基督イエス」 p. 599, 注釈 5
3. 「基督イエス」 p. 707, 注釈 2
4. 「基督イエス」 p. 708, 注釈 4



オリブ山——イエスがしばしば訪れた山



バプテスマを受ける決意を 下しかねている方々へアド バイスを

あなたの証と体験をお寄せ下さい

これまで多くの聖徒の皆様から、数々の靈感あふれる体験や改宗の過程を証としてお送りいただき、一同感謝しております。

さて、現在日本全国で1,000を越える家族の方々が、宣教師から教えを受けておられます。これらの方々の多くは、私たちがたどったと同じ道をたどり、同じ苦悩、問題を抱えておられます。そこで、こうした方々のバプテスマの決意に少しでも役立てるべく、皆様のバプテスマを受けるまでの過程で経験し、あるいは悩み解決した問題、それを克服した方法、証、喜びをこのページを通じて分かち合いたいと思います。神の存在を信じられなかった方、どうしても祈りができなかった方、知恵の言葉を守ることのできなかった方、家族が他の宗教を信じているために、その板ばさみで悩んだ方、什分の一の問題が乗り越えられなかった方、社会から孤立してしまうのではないかと悩んだ方、安息日を守れなかった方、伴侶の同意、家族の同意が得られなかった方がおられると思います。現在レッスンを受けておられる方々の中にもそういった方がたくさんおられます。どうぞ、あなたが悩んだ問題とその解決方法をできるだけ具体的に書いて、下記にお送り下さい。

〒106 東京都港区南麻布5-10-25

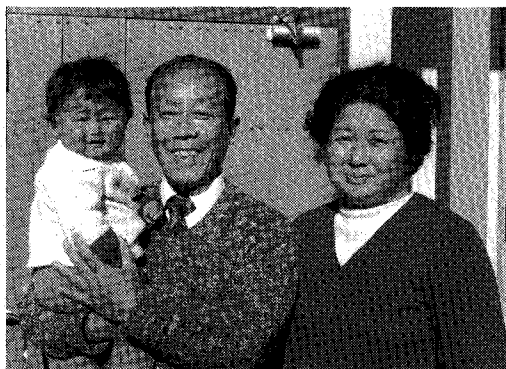
中正堂会館

末日聖徒イエス・キリスト教会翻

訳事業部 日本語コーディネーター

八木沼修一

出 来 事	マタイ	マルコ	ルカ	ヨハネ
大いなる祈り ベテロが3度キリストを否定することの予言 ⁴ ゲッセマネの園におけるキリストの祈り 裏切り 捕縛	26:31-35 26:36-46 26:47-50 26:51-56	14:27-31 14:32-42 14:43-45 14:46-52	22:40-46 22:47-48 22:49-53	17:1-26 18:1-2 18:3-9 18:10-12
第6日(金曜日) アンナスの前に立つ カヤバのもとへ連れて行かれる——尋問、不当な扱い、ベテロの否定 議会で裁判と罪の宣告 イスカリオテのユダの死 ピラトの前に立つ ヘロデの前に立つ 再びピラトの前に立つ (バラバ、釈放される) 十字架の刊——十字架上の罪状書き 十字架上での最初の言葉 兵士たち、イエスの着物を分ける 役人たち、イエスをあざける 十字架上での言葉 全地が暗くなる 十字架上での最後の言葉 イエス、死ぬ 百卒長の証 脇腹を突きさされる 埋葬	26:57-75 27:1-2 27:3-10 27:11-14 27:15-30 27:31-34 37-38 27:35-36 27:39-44 27:45 27:46-47 27:48-50 27:51-56 27:57-61	14:53-72 15:1 15:2-5 15:6-19 15:20-23 25-28 15:24 15:29-32 15:33 15:34-35 15:36-37 15:38-41 15:42-47	22:54-65 22:66-71 23:1 23:2-5 23:6-12 23:13-25 23:26-33 38 23:34 23:34 23:35-37 23:39-43 23:44-45 23:46 23:45, 47-49 23:50-56	18:13-14 19-23 18:24-27 15-18 18:28-38 18:39-40 19:1-16 19:16-33 19:23-24 19:25-27 19:28-30 19:31-37 19:38-42
第7日(土曜日) 墓の番をする	27:62-66			
翌週の第1日(日曜日) 復活——天使たち、墓を開く マグダラのマリヤ、墓へ行く マリヤ、ベテロとヨハネに告げる ベテロとヨハネ、墓へ行く イエス、マリヤに現われる マリヤ、弟子たちに告げる 他の女たち、墓へ行く キリスト、女たちに現われる 他の女たち、弟子たちに告げる 祭司長たち、番人から報告を受ける イエス、エマオへ向かう弟子たちに現われる ベテロに現われる トマスを除く、使徒の全員に現われる	28:2-4 28:1,5-7 28:9-10 28:8 28:11-15	16:9 16:10-11 16:1-7 16:8 16:12-13 16:14	24:12 24:1-8 24:9-11 24:13-32 24:34 24:33-49	20:1 20:2-5 20:6-10 20:11-17 20:18 20:19-23
週の最初の日の現われに続いて何度か主の現われがある				
トマスを含む使徒たちに現われる テベリヤの海辺で弟子たちに現われる 大勢の人々に現われる (1コリント15:6) ヤコブに現われる (1コリント15:7) ガリラヤで弟子たちに現われる (使徒1:1-8) 昇天(ベタニヤにおいて) 弟子たち、エルサレムへ戻る ヨハネの証	28:16-20	16:15-18 16:19 16:20	24:50-51 24:52-53	20:24-29 21:1-23 20:30-31 21:24-25



周藤兄弟ご夫妻と
初孫の純子ちゃん

この人生は魂の訓練の場

桐生支部

周藤清太郎

私は「人生五十年」という言葉を目標に生活してきました。50歳になるまでに、いろんなことを経験しておこう、それから先は『もうけもの』と思っていました。そして、もうそろそろ50歳という頃、「さあ、残された人生をどう生きようか、何をしようか」といろいろ考えました。いろいろ思いめぐらした末に決めたことは、とにかく、これからの人生は、目標を定めて、生きがいのある生活をしようということでした。そして死ぬときは、満足感とは言えないまでも、自分はやるだけのことはやったという気持で去って行ければ、これが一番幸せではないだろうかと思ったのです。

1970年、大阪で繊維機械展が開催され、繊維加工業を営んでいた私も、仲間と参加しました。帰路、万博に寄ってみました。じりじりと照りつける夏の日差しと人混みに疲れ、ゆっくりできる涼しいところを探しました。そのとき目にとまったのがモルモン・パビリオンです。アメリカ館やカナダ館に比べ、そこは待つ必要もなかったので、特に考えることもなく入り、説明を聞いていました。やがてガイドの方から「モルモン経」を買うように勧められました。旅の途中、週刊誌を数冊買って読みかけましたが、どれもたいしたことは書いてなかったので、これでも買って帰りの列車で読もうかと思い購入しました。自分はキリスト教には無縁だと思っていましたので、ガイドの説明に特に興味を持ったわけではありませんでした。ためになることを悟っていらっしゃるだろうから聞いてあげようという軽い気持でお話をうかがってありましたところ、映写室へ案内されました。そこには、30人位の人々と数人の外人がいました。私は、外人との接触はなかったので、目立たないところに行こうと、隅の椅子にすわりました。するとひとりの外人が近づいてきて、「失礼ですが、時間がありますか」と声をかけてきました。これは困った、変なかかわりができたらどうしようと思いましたが、時間が無いわけでもないの、「はい」と答えましたところ、「映画の後で時間を下さい」と言って去って行きました。私は、あの外人は私に何の用件があるのだろうか、断わっておけば良かったかなと気になって、始まった映画も上の空でした。そんな気持ですわっていたので、映画の内容もわかりませんでしたが、ナレーターの語った言葉の中で、ひとつだけ忘れられない言葉がありました。それは「この人生は、魂の訓練の場である」という言葉です。

映画も終わったので、私も人混みにまぎれて逃げ出そうとしたら、先ほどの外人に会ってしまいました。彼は私を裏の方へと案内しました。狭い通路を進みながらこの若い外人は私だけに何をしようとするのかと不安になってきました。やがて案内された部屋に入りますと、かっぶくの良い年配の外人が迎えて下さいました。その方はバーナード・P・ブロックバンクだと自己紹介された後、「このパビリオンをどう思うか」と尋ねられました。私は「特に感じたことはありません」とまず答えましたが、それから少し私が思ったことを話しました。それは、科学の粋を

集めた万博の中で、ここはたったひとつの心のオアシスのように思えたこと。また、各パビリオンが、物質文明の最先端を展示している中で、ここだけに心の展示があるような気がしたことなどです。

この万博での経験は、桐生に帰ってから私の心に残っていました。しかし当時、一番近いモルモン教会は高崎でしたので、そんなところまで行くつもりはありませんでした。でも何かをやりたいという気持がありましたので、同業の友人が行っているプロテスタントの教会へ行きました。彼はとても歓迎してくれ、私もほとんど毎週教会へ行ってみました。家族の者には内証にしていました。それはかねがね50歳までに宗教に関心を持つ者は気の弱者で、精神的中風に冒されている人だと言っていましたから自分が教会に行っていることなど、とても恥ずかしくて話せませんでした。日曜日になると10時頃から1時頃まで、黙って消える私に、家族の者は、お父さんは、最近何をたくらんでいるのだろうかと思っていたようです。そんなお正月に伊勢参りに行こうと誘われ、仲の良いグループで出かけました。

旅から帰ってくるなり、家族の者が「お父さん何をしてきたんだ」と尋ねるので、「何かあったのか」と聞くと、「変な外人から電話があって訪問したいと言うので迎えに行くと、ふたりで来て、周藤清太郎という確にお父さんの署名したカードを持って来た」ということでした。考えてみるとそれは以前、万博で記入したカードでした。

数日後、彼らがお見えになり、「お話させて欲しい」との申入れでした。私は、プロテスタントの教会に通っていたので、お断わりしたいと思いましたが、何かしら若いふたりの外人にひかれるものがありました。まず遠いアメリカから2年間、自費でやって来て、見ず知らずの私のために、どうしてこんなにまで骨を折って下さるのか不思議でした。彼らを動かしているエネルギーはどこから来ているのだろうかという疑問が湧いてきました。とにかくお話を聞いてみようと言うことで、職場や近所の人々に呼びかけ、15人位の人が私の家に集まりました。しかし会が重なるにつれ、人数は少なくなり、とうとう私ひとりになってしまいました。私も困ってしまい、もうこれで断わりようとも思いましたが、何かひきつけられるものがあり、そのまま聞いていました。3月のある日、宣教師は知恵の言葉を教えて下さいました。1日60本のタバコと就寝前のコーヒーを友としていた私は、お茶までもいけなと言われる、そんな馬鹿なことをと驚き果ててしまいました。しかし翌朝、不思議なことが起こりました。いつものように家族がそろって朝茶をいただくとしたときです。私の心の中には、昨晚宣教師が語った「お茶はいけません」という言葉がよみがえってきました。どうしようかとためらっている私に、母が「さあ、お茶がはいったよ」と言います。宣教師の言葉も気になるし、これは困ったなあと迷っていると、母は「けさは麦茶だよ」と言っ

たのです。私は本当にびっくりしました。今までにわが家で麦茶を飲んだ記憶はありません。しかも夏の出来事ではないのです。こんな季節に麦茶がでてくることは考えられないことです。母は昨晚宣教師から麦茶なら飲んで良いと聞いたわけではありません。レッスンを受けたのは、私だけで、私はまだ家族のだれにも知恵の言葉について話していません。これには驚きました。その朝以来、私はお茶を一滴も飲んでいません。

そして数ヵ月経過しました。日曜日にはプロテスタントの教会に行き、週日にモルモンの宣教師から勉強するという奇妙な日々が続いていました。いつまでもこんなことをしてはいけなしいと思ひ、プロテスタントの友人に、実はモルモン教会の宣教師から教えを受けていると話しました。そしてこのままでは気持ちがすっきりしないのでどちらにすべきか君に決めて欲しいと相談したところ、彼は、「モルモンの宣教師は自分の家にも来たが、親の代からのプロテスタントなのでモルモン教会に行くことはできない。でもいつでも遊びに来て下さいと告げて帰ってもらった」と語った後「周藤さん、他の宗教には行っても良いが、あの教会だけはやめて欲しい。行くのなら、わたしの教会に今迄通りに通って欲しい」と言いました。私は「そうですか」と答えて帰りました。その後、彼は私の家にも訪問して下さいました。彼は、自分が今までに経験したことを話しました。不思議なお茶の出来事を伝えたところ、彼は「うーん」とうなりました。そして「周藤さん、それは証というものですよ。私たちはそれが持ちたくても持っていないんです。残念ながらそれがありませんよ。周藤さん、それが私たちが望んでいる証なんです」と言われました。証という言葉は初めて聞きましたが、よくわかりませんでした。数日後、お見えになった宣教師といつものように家庭集会を開いているとき、不思議なことが起こりました。ふたりの宣教師からレッスンを受けているとき、私は夢を見ているような気持ちになりました。ふたり差向いになって彼らの言葉を聞き、受け答えをしていましたが、次第に話しているのは宣教師ではないという気がしてきました。その気持ちがあまりにも強くなってきましたので、私はとうとう宣教師に「ちょっと待って下さい。今、あなたが話しているのは、あなた自身なのですか、それともだれかほかの人が話したのですか」と質問しました。宣教師はびっくりした様子でしたが、私は「あなたの後ろにだれかがいて、その人があなたの口を通して話しているように感じる。あなたの声が聞こえない」と言いました。この経験は、私の心を強くとらえました。全然ふたりの話として聞こえなかったのです。だれかが、ふたりの口を借りて語っている感じでした。そんなことが数回ありました。

ひとりでお祈りしようと思ったこともありましたが、でも恥ずかしくてなかなかできませんでした。妻子が寝静まってからしましたが、年をとってからの初めてのお祈りはてれくさく、脂汗が出るような気持ちでした。

いよいよバプテスマを受ける段階に入りました。父にキリスト教に入ると言いましたところ、我家は仏教で、代々先祖を大切にしているのだからだめだということでした。そこで、系図探求のことを説明しましたところ、両親は驚き、「なるほど、そんなにまで先祖を大切にしている教会なら、いいじゃないか、お前がやりたいのならやいなさい」と理解してくれました。

1972年7月22日、私はバプテスマを受けることになりました。しかし、今まで通っていたプロテスタントの友人にも大変お世話になったので、自分の決心を事前に伝えておこうと当日の朝電話しました。そして、今まで大変お世話になったこと、自分がこの道を選んだことはその友人との感情の行き違いから決めたことではないこと、過去50年間育ててきたふたりの友情は今も変わらない

し、将来も持ち続けたいことを伝えました。そして、自分には知恵の言葉や什分の一、安息日など、厳しいことを要求する教会の方が、真実の教会のように思えるので、きょうバプテスマを受けますと知らせました。

私のまわりにいる人々の中から、バプテスマを受ける方が増えてきました。しかし、妻はまだ教会に対して関心がありませんでした。職場の女性の方がバプテスマを受ける日、妻に教会へ行ってその方の着替えを手伝って欲しいと頼みました。しかし、宗教は自分に関係ないことだし、夕方は家事で忙しく、そんな暇はないと断わられてしまいました。

再三行くように誘いましたがだめでした。私は全く失望し、重い足取りで教会に行きました。妻がこの状態で、私自身この道を歩む意味があるのだろうかと考え込んでしまいました。そして、妻がだめなら、もうこれ以上教会へも行きたくないという気持ちになりました。儀式の始まりを待つ時間、教会の二階へ行き、お祈りをしました。今までいろいろ努力してみたが、どうしても妻が心を開いて福音を受け入れてくれない、このままだと、もう教会へ来ても意味がないように思う、妻と共に歩めてこそ永遠の喜びがあるのだから、私にはその資格がないように思う、でもみ旨にかなうなら、ぜひとも妻が教会に来れるように助けて欲しいと主に嘆願しました。お祈りが終わり、二階から降りてきて驚きました。妻がそこにいて、一生懸命バプテスマを受ける女性のお手伝いをしているではありませんか。

着替えを持ってきたり、タオルを渡したりして、かいがいしく世話をしているのです。私はその姿を見て神様に深く感謝しました。またあるときは、教会に出かける前、妻と一緒に連れてくれるようにひとりでお祈りしていました。お祈りを終えてふり向くと妻が歩いてきました。「私は忙しくて行けませんよ」と言われるのかと思っていたところ、「お父さん、ちょっと待ってて、私もしたくしてくるから」と言いました。そんなことが数回ありました。

神様は確かに生きていらっしゃる、私たちにその気があれば、必要なときに助けて下さるとの確信が強まってきました。1975年夏の日本地域総大会には、ぜひとも夫婦で参加したいと思いました。そして妻は、総大会1週間前にとうとうバプテスマを受けたのです。

総大会は記念すべき出来事でした。妻と共に参加できたことは大きな喜びでした。今まで妻のために心配して下さった兄弟姉妹に、妻がバプテスマを受けたことを知らせようとしました。しかし、大変な混雑でなかなか渡辺驪長老のところへ近づけません。彼のバスがもう走り出そうとしたとき、私はまだ車で10メートル位のところで人波にもまれてしまいました。

これでは連絡できないと残念に思っていたところ、彼がバスから身を乗り出して「周藤兄弟、周藤兄弟！」と手を振り私を呼んで下さったのです。特に背が高いわけでもない私を、しかも薄暗い通路の人混みの中にいたのに、どうして見つけれられたのでしょうか。思いがけない呼び声に、私は力一杯背伸びし、「私の妻がバプテスマを受けて、大会に来ていますよ」と叫び返しました。「よかったね、よかったね」という返事を受け、私はうれしさに一杯でした。また出口で伝道部長御夫妻にお会いしました。妻のことを紹介すると「おめでとう」と握手をして下さいました。特に奥様は、妻に抱きついて、ポロポロ涙を流しながら喜んでくれました。後で妻は、私は今まで自分のためにあんなにまで涙を流して喜んでもらったことがあったかしらと感激していました。系図調べにおいても、財政的な面においても、私は神様から数多くの祝福とお導きをいただいています。神様が確かに生きていらっしゃる、この教会が真実、神様の教会であることを証します。

